へて出陣の準備を部下に命じた。事情を知らない世人は秀吉が根來征伐をやるのではないかと噂し合つたが、戰爭は濃尾の平野で行はれた。その方面でも高山右近や池田丹後などキリシタン武士の武功が相當に目立つた。しかし一層目立つたのは、將兵の留守中に小西行長のやつた海軍の活動であつた。大坂の武備が空になつてゐる隙に、根來の僧兵は大坂を占領し本願寺を元に歸さうとして、動き出したのである。建設中の大坂の町は非常な混亂に陷り、オルガンチノさへも會堂を棄てて船に避難した。この時、僧兵の進擊を喰ひとめて危く大坂を救つたのは、岸和田城を守つてゐた中村一氏と、七十艘の艦隊を率ゐて急遽堺の前に現はれた小西行長とであつた。行長の船には、多數の大きいモスケット銃・大砲一門・小砲數門を載せてゐた。彼は兵を海岸に上げて敵兵を擊退した。この海軍の活動に着目した秀吉は、その夏には、尾張で水攻めにしてゐる敵城を攻擊する爲に、行長の艦隊の出動を命じたのであるが、更に翌一五八五年の春、右の根來の僧兵や紀伊雜賀の本願寺の討伐に向つたときには、行長の艦隊を初めから共同作戰に使つたのであつた。勿論主力は陸軍で兵數は十萬を超えたといはれる。この全軍の指揮官は二人であつたが、その一人は高山右近であつた。この優勢な軍隊が、損害をかまはず敵の出城三つ四つを强襲して全滅させたので、根來、粉河等の僧兵は、敵を待たずして雜賀に逃げ込んだ。雜賀は今の和歌山附近で、海と紀の川と山とに圍まれた要害の地である。雜賀の前面に二つの重要な城があつたが、その一つは海の司令官小西行長が引き受けて攻略し、それが刺戟となつて他の一つも片附いたが、行長の目ざましい功名はこのあとの雜賀の本城の攻擊であつた。そこは非常な要害で、根來と雜賀の主力が立て籠つて居り、軍需品も米二十萬俵を初めとして、極めて豐富であつた。强襲は不可能であるから秀吉は水攻めの策を取り、高さ六七間、厚さ二十數間の土壁を城の圍り二里に亙つて築き上げ、そこへ紀の川の水を引いたのであるが、それだけではまだきめ手がなかつた。そこで秀吉は、行長の艦隊に命じて湖水に入り船から城を攻擊させたのである。攻圍軍の將士は安全なところからこの攻擊を見物してゐた。行長は十字の旗を揭げた船を率ゐて城壁に近づき大砲・小砲・大モスケット銃などを用ゐて攻擊を開始した。それは二三時間續いた。行長は多數の船を巧みに指揮して城の大部分を占領した。周圍から眺めてゐた全軍は、この光景に非常な感銘を受けた。この攻擊で行長の船は一艘も燒けず、戰死者も非常に少數なのであつたが、甚だしい煙と火に驚いた秀吉は、行長の艦隊が大損害を受けたものと思ひ、退却の信號をさせた。が、この攻擊の結果として雜賀の城は降服したのである。この功勞によつて行長は秀吉の全領土の艦隊司令長官の地位を與へられ、これまで管轄してゐた小豆島をその領土にして貰つたのであつた。

高山右近もこの戰爭の際に、根來の寺を秀吉から貰つて、大坂の會堂建築の用材に當てた。神父セスペデスはロレンソをつれて雜賀へ禮を云ひに行つたが、その時はまだ攻圍中で、秀吉は全軍環視の中に土壁の上で彼らを引見した。この高山右近の仕事といひ、小西行長の功名といひ、キリシタン大名はかなり派手に、人目につく活動をしてゐたのである。だからそれが多くの武士たちを引きつける刺戟となつたことは爭はれない。もつとも蒲生氏郷が洗禮を受けたのは雜賀征伐の直前であつたが、彼をこゝまでひきつけたのは、高山右近の熱心な勸誘であつた。傑物黑田孝高を先づ動かしたのは、小西行長である。それを洗禮にまで導いたのは、右近と氏郷とであつた。

これらの大名はこの後二三年の間、キリスト教を非常に盛大なものにした。小西行長はその領地の室の津や小豆島をキリスト教化したのみならず、海の司令官としての權力を廣く諸方に及ぼし、布教を助けた。既に一五八五年の夏に、神父パショは、豐後から京都へ行く途中兒島半島突端の日比の港で、秀吉の十萬の遠征軍を四國へ渡らせてゐる小西行長に逢ひ、その勢力の强大なこととその指揮の巧みなこととに驚嘆してゐる。やがて一五八七年に秀吉の九州征伐が行はれる頃には、彼の艦隊は九州の西海岸へ進出するのである。島津の兵が臼杵を占領して宗麟の建てた壯麗な會堂やノビシヤドの建物を燒き拂つたとき、豐後の教會の人々を救出して下の關へ運んだのも、彼の力であつた。陸では黑田孝高の活躍が目ざましい。彼は小寺官兵衞として秀吉の播磨平定の頃から頭角を現はして來たのであるが、やがて、毛利氏と秀吉との間の妥協に腕をふるひ、秀吉の九州征伐以前に、中國から北九州に亙つて、準備工作を仕上げたのであつた。その際副管區長クェリヨを助けて山口の教會の回復を成功させるとか、小早川隆景に說いて伊豫の開拓を始めるとか、島津の兵に蹂躙された大友領内のキリシタンを支へるとか、その機會に大友義統を說いて洗禮を受けさせるとか、中々積極的にキリシタンとして動いてゐるのである。小早川隆景は筑前筑後の領主になつたが、その養子秀秋は洗禮を受け、秀吉の命によつて宗麟の娘マセンシヤと結婚した。孝高の嗣子黑田長政も、秀吉から豐前の父のもとへ派遣されたとき、父にすゝめられて洗

禮を受け、熱心な信者となつた。

そのやうな情勢のところへ、高山右近もまた秀吉に從つて西下して來たのであるから、九州征伐に際して陸からも海からも十字の旗が押し進んで行つたといはれるのは、必ずしも誇張ではない。

三　秀吉の宣教師追放令

秀吉は尾張の農民の子から日本の絶對權力者にまでのし上つて來た男である。因襲の力をはねのけて赤裸々の實力に物を云はせるといふ當時の社會的情勢を、彼ほどはつきりと具現してゐる人はない。從つて彼はまた、何人でも、才能さへあれば、身分が何であらうと、その奉ずる宗教が何であらうと、かまふことなく拔擢し起用した。小西行長、黑田孝高なども、その顯著な例なのである。從つて彼は、宗教的偏見などは持たず、人に對して極めて自由な態度を取つた筈である。しかるに彼が宣教師たちに與へた印象は、信長ほどに好くなかつた。信長の死の當時、その後繼者として急に注意され始めた秀吉について宣教師たちの記してゐるところは、すべて同情のない調子である。秀吉が「勇猛」で、「戰爭が巧い」といふこと、「身分や家柄が高くない」といふこと、「富と權勢と地位」とにおいて信長以上であることなどを彼らは報告するだけである。そのほかには――むしろこの方が重大なことであるが、――秀吉は信長ほどに他人の意見を容れる力がない、自分の意見を他の誰のよりも優れたものと考へてゐる、などといはれる。或は、その傲慢と權力欲とが信長以上であるといはれる。さういふ意見を書いてゐるフロイスは、信長の死んだあとで信長の傲慢を手ひどく非難してもゐるが、しかしそれまで信長と接觸した永い間の報告には、かなり濃厚に信長の人柄に對する同情を見せてゐたのである。信長は信仰の要求を持たず、從つて宣教師の要求する第一の資格を缺いてはゐたが、しかし未知の世界に對する強い好奇心、視圈擴大の強い要求を持つてゐた。それは權力欲の充足によつて靜まり得るやうなものではなかつた。それをフロイスは感じてゐたのである。ところで秀吉には、さういふ點がまるでなかつた。これは甚大な相違だと云つてよいのである。

かういふ相違をはつきり見せてゐるのが、副管區長クエリヨの謁見の際の秀吉の態度だと云つてよい。クエリヨは一五八六年三月六日に神父四人イルマン三人を同伴して長崎を出發し、平戸、下の關を經由して東上した。丸龜沖の鹽飽島で小西行長の船の出迎へを受け、室津、明石、兵庫に寄つて、四月二十四日に堺に着いたが、そ

の時にはキリシタンたちは、秀吉が果して副管區長を引見し款待するかどうかを疑つてゐたのである。しかるに案外にも秀吉は、これまで曾てヤソ會士に對して示したことのない款待の態度を見せた。それは五月四日のことで、クエリヨは神父四人、イルマン四人、同宿十五人、セミナリヨの少年數人、合せて三十餘人をつれて大坂城を訪ねた。案内者は安威シマンと施藥院とであつた。一行は公の儀式に用ゐる建物に通され、その日登城してゐた前田利家、細川忠興その他の諸大名も席に列なつた。高山右近も勿論その中にゐた。やがて秀吉が現はれて、奥正面に着座し、安威志門が一人々々名を呼んで紹介した。そのあとでクエリヨたちを座敷内に近く進ませ、秀吉自身も座所から出て神父の側に坐り、親しく話を始めた。通譯とした附いてゐたフロイスは秀吉と古い馴染であつたので、まづフロイスを相手にいろ〳〵と昔話をしたが、それにひつかけて次のやうな述懷をもらした。日本にゐる宣教師たちがたゞ一途に教を擴めることだけに專心してゐるのは大變によい。自分も權勢と富を得ることに專心してそれを成就したのであるから、ほかに何も得ようとは思はない。たゞ己れの「名」と、權勢の評判とを、死後に殘さうと思ふだけである。日本のことが片附けば、これは弟に讓つて、自分は朝鮮とシナを征服するために海を渡らうと思ふ。そのためには二千艘の船をつくる。そこで神父たちに頼みたいのは、十分に艤裝した大きい帆船二隻を調へて貰ひたいことである。勿論代價を拂ふ。乘組員には給料を與へる。もしこの計畫が成功してシナ人が歸服すれば、シナの各地に會堂を建て、キリスト教に歸依することを命じて日本へ歸つてくる。日本もまた半分位、或は大部分をキリシタンとなすべきである、といふのであつた。

これはまことに矛盾した云ひ分である。キリシタンの宣教師が一向一揆のやうに政治的意圖を持たないことを賞讃しながら、同時におのれのシナ侵略の計畫に協力することを要求する。しかしそれは秀吉の意圖においては矛盾はなかつた。彼は、キリシタンの宣教師が國内の政治の邪魔をせず、自分の役に立つことを要求したのである。布教の代償として造船の技術を提供させることは、彼にとつては無理な取引とは思へなかつた。しかしそれは純然たる取引であつて、未知の領域への探求などではない。根本にある知的能力は彼にとつて問題ではなく、たゞかゝる能力の產み出した果實だけが彼に必要だつたのである。これは在來キリスト教を排擊しつゝたゞポルトガル貿易の利益だけを得ようとしてゐた諸大名の態度を、一層巧妙な仕方で現はしたものに過ぎない。その肝

腎の點をクエリヨは看取しなかつたやうに見える。

フロイスとロレンソとは、永い間信長に接してゐた關係上、この點に氣づかなかつた筈はない。この時の謁見のあとで秀吉はクエリヨの一行を天守閣に案内し、そこに貯藏された巨大な富や物資を自慢して聞かせたり、最上階まで連れて行つて四方を展望しながら九州征伐の計畫について氣焰を吐いたりしたのであるが、その際フロイスは、秀吉の自慢する黃金の組立茶室を、是非拜見したいと云ひ出してゐるし、雄辯なロレンソは口を緘して何事も喋舌らなかつた。これはいづれもこの人たちの平生の態度ではない。秀吉は、曾て信長の面前でフロイスと日乘とが激論し、日乘がロレンソを切らうとした時のことを云ひ出し、老いたるロレンソの頭に手を載せて、「お前は何故默つてゐて話をしないのだ」とさへ云つてゐる。しかしこの二人と雖も、まだはつきりとした意見を立てるまでには至らなかつたのであらう。

クエリヨはこの謁見の後、秀吉の夫人北の政所を通じて、キリスト教布教の特許狀を得ようと努めた。秀吉の全領内における布教の許可、宣教師館及び會堂に對する諸種の課役徵用等の免除がその内容であつた。秀吉はおのれの領内といふ云ひ現はしを日本全國といふ言葉に改めて、その特許狀を與へた。當時の情勢としては非常に有力なもので、山口の教會の回復のためにも非常に役立つたのである。

クエリヨがかういふ在來のやり方をそのまゝ續けて行かうとしてゐた時に、秀吉の手中において一世紀來の下剋上の趨勢が突然打切られようとしてゐたことをわれわれは見のがしてはならない。シャビエル渡來後の三十五六年の間、卽ち秀吉が農村の一少年から關白にまでのし上つてくる間は、特にこの趨勢の激甚な時で、民衆の中にあつた力がどし〳〵表面に浮び上り、傳統的なものの權威が次から次へと壞されて行つた。しかるにそれが行くところまで行き、農夫の子の秀吉が關白になつたとたんに、彼はその絕大な權力を以て現狀の固定、從つて下からの力の禁壓を計つたのである。その最も端的な現はれは、一五八六年の秋、京都の大佛造營に着手するに當つて行はれた刀狩りであつた。これは全國の僧侶及び民衆の武器沒收、武裝解除である。それによつて一揆はすべて不可能になり、民衆に對する武士團の威力が非常に增大する。社會の組織はすべて武士階級に都合のよいやうに、思ふまゝに定めることができる。さういふ思ひ切つたクーデターを秀吉はクエリヨ謁見の數ケ月後に斷行したのである。

これは實に大きい情勢の變化で、この時に、近世ヨーロッパにおけるやうな町人の發達の可能性が押しつぶされ、武士階級の支配が確立してくるのであるが、しかしその變革は諸所の農村で地味に目立たず行はれたのであつて、その翌年の九州征伐のやうな花々しい出來事ではなかつた。だから九州征伐が一通り終つた一五八七年七月廿四日に秀吉が博多で宣教師追放令を出した時、それはいかにも突然で、その夜の氣まぐれに基くかのやうに感ぜられた。しかしさうではなかつたのである。民衆を武裝解除する秀吉の氣持のなかには獨裁權力者の自信や自尊は顯著であつたであらうが、未知の世界への探求心や視圈擴大の要求はもはや存しなかつた。宣教師たちが自分の用をつとめなければ追ひ拂ふ、――それは前の年にクエリヨに特許狀を與へたときの秀吉の腹であつた。

秀吉が九州に入つて八代まで進んだとき、クエリヨは會ひに行つて捕虜の助命などをした。その時秀吉は、いづれ博多に行くから、その時また會ひに來てくれと云つた。で島津が降つて戰爭が片づき、秀吉が博多に引き返してこの町の復興につとめてゐたとき、クエリヨは再び訪ねて行つた。さうして宣教師館や會堂の地所を貰つたのであるが、その際にも秀吉はシナ遠征の計畫をはつきりと語つた。また或る日海上でクエリヨの乘つてゐたフスタ船を見て、それに乘り移り、熱心に船の構造を觀察した。その頃に秀吉は、ポルトガル船を見たいから、平戸に碇泊してゐる船に博多へ回航するやう交渉してくれと賴んだのである。これは前の年のクエリヨへの申入れに對する回答を促したものと見ることができる。

クエリヨがこの一年の間にポルトガル船の入手について何の努力もしてゐなかつたことは明かである。彼はそれが自分たちの運命に關する重大な問題であるとは思はず、全然閑却してゐたのであらう。たとひポルトガル船の入手が不可能であるとしても、その不可能な所以を秀吉にのみ込ませるやうな手段が講じてあれば、――或は少なくとも造船の技術だけでも敎へるやうな方法を考へてゐたならば事はもう少し圓滿に行つたかも知れない。しかるにクエリヨは、この回航が危險で實行し難いことを說明しつゝ、極めて消極的な態度でこの申入れを船長に取りついだだけであつた。船長も小さい船で平戸からやつて來て、秀吉に大帆船の回航がいかに危險であるかを說明した。秀吉はこの辯解を納得したかのやうに、船長一行を款待して船に歸らせた。それが七月二十四日のことであつた。

その夜、突然、秀吉は心を變へてキリスト教迫害を始めた、とフロイスは報告してゐる。秀吉自身はずつと前

から考へてゐたと主張してゐるが、それはこのやうな大事を輕々しく氣分一つできめたと思はれないためであつて、實際は突然の怒りによるのである。かく解釋してフロイスは、元比叡山の坊主であつた德運の高山右近に對する憎惡や、有馬領で秀吉のために美女を求めてキリシタン女子のために恥をかいた話などを擧げてゐる。しかしヨーロッパ風の大帆船のことは一年來の懸案である。それに對するクエリヨの解決がいかにも拙かつたことは認めなくてはならない。だから秀吉の、ずつと前から考へてゐたといふ主張は、或る意味では正しいであらう。それが船長に會つた日の夜起つたといふことも、いかにももつともである。すでに事件の二日前に、布教の前途について樂觀的な期待を述べたクエリヨに對し、高山右近は、「激しい迫害が突然起りはしないかと心配してゐる」と云つた。少なくとも右近は何かを豫感してゐたのである。

その夜秀吉は右近の許に使者を送り、キリシタンをやめるか、或は直ちに領地を捨てよ、と傳へさせた。右近は平然として領地を捨てる旨を答へた。使者も友人も、表面だけは命令に從ふやうに勸めたが、彼はきかなかつた。もしこの通り復命しないならば、自分で秀吉の前へ出て答へると云つた。

秀吉はまた使をクエリヨの船に送り、眠つてゐた神父を起して次の質問に答へさせた。神父たちは何故にかくまで熱心に布教し、改宗を强制するか。何故に社寺を破壞し坊主を迫害するか。何故に人間に有用な牛馬を食ふか。何故に日本人を買つて奴隸にするか。クエリヨの答はかうである。救ひは主エス・キリストによつてのみ得られるが故に、われ〳〵は、それを日本人に說きに來たが、しかし曾て强制したことはない、また權力なきわれわれには强制などをすることも出來ない。社寺を破壞したのは信者の自發的な行動であつて、われ〳〵がさせたのではない。牛肉は自國の習慣に從つて食ふが、馬肉は食つたことがない。その牛肉も食ふなとあれば止めてもよい。奴隸賣買があるのは、日本人が賣るからである。われ〳〵はそれを悲しんで防止に努めたが力及ばなかつた。奴隸賣買を欲しないならば、先づ賣ることを禁止すべきである、と。これらの答はいかにも戰鬪的である。クエリヨはかく答へると共に死に就く覺悟をしたのであつた。が同夜は右近追放の通告を受けただけであつた。

翌七月廿五日に秀吉は諸侯を集めて宣教師追放を公表した。宣教師たちは救ひを說くことを口實として人を集め、やがて日本に大きい變革を起さうとしてゐる。彼らは博識の人であつて、巧妙な議論により多數の大身たち

をたぶらかした。その欺瞞を見破つたのは自分である。今にして彼らの企圖を押へなければ、一向一揆と同じになるであらう。否、彼らは、本願寺の坊主と異なり、日本の主立つた領主たちを引きつけるが故に、一層危險である。神父がキリシタン大名たちを率ゐて叛起したならば、容易に抑へることが出來ぬであらう。かく說いて彼は追放令を示した。

一、日本は神國である。キリシタン國から邪法を傳へたのは怪しからぬ。

二、彼らが諸國の人民を歸依させ、神社佛閣を破壞させたのは、前代未聞のことである。領主たちは一時その土地を預かつてゐるのであつて、何事でも勝手にふるまふ權利を持つのではない。天下の法律には從はなくてはならぬ。

三、神父はその智慧の法を以て自由に信者を持つてよいと考へてゐると、右の通り日本の佛法を破壞する。だから神父らを日本の地に置かないことにする。神父らは今日より二十日以內に用意して歸國すべきである。この期間に神父らに害を加へれば處罰されるであらう。

四、黑船は商賣のために來るのであるから、別である。貿易はやつてよい。

五、今後、佛法のさまたげをしないものは、商人でも何でも、キリシタン國から自由にやつて來てよい。

この追放令は直ちにクエリヨ及び船長の所へ傳達された。クエリヨは、船が今後六ケ月間は出帆しないから、二十日以內には出發出來ないと答へた。そこで秀吉は神父らに平戶へ集まれと命じた。日本人イルマンも同樣である。

それについで十字の旗の徹去命令、大坂、堺、京都等の宣教師館の沒收、長崎、茂木、浦上の教會領の沒收、長崎のキリシタンへの罰金負課、大村、有馬領內の諸城及び會堂の破壞などが行はれた。大村純忠が二月前に、大友宗麟が一月半前に死んだばかりであるから、ヤソ會の受けた打擊はまことに大きかつた。

追放令は急に諸方へ傳達された。高山右近の新領地明石をはじめ、大坂、京都などのキリシタンは大騷ぎであつた。宣教師たちは急いで平戶へ行かなくてはならぬ。が、信者らの信仰の情熱はこの迫害に面して反つて燃え上つた。宣教師に對する同情は、異教徒の間にさへも起つた。

當時日本にゐるヤソ會士は百十三人で、ほかにセミナリヨの生徒七十餘人、その他多數の同宿、宣教師館の使

用人などがあつたが、この時の追放に際して害を受けたものはほとんどなかつた。新しく開かれた山口の教會や下の關の宣教師館においてもさうであつた。この追放は不當である、道理に反してゐる、日本の恥である、さう日本の武士たちは感じたのである。

京都にゐたオルガンチノは、平戸へは行かず、小西行長の領地に隱れた。彼が八月十七日に室から出した書簡によると、八月初めに追放の知らせを受けて、いろ〳〵教會のことを處理したときの狀況は、「原始教會の迫害以來、曾て見たことのないもの」であつた。キリシタンたちは皆殉教者となることを望んだ。彼らの内に、これほど大きい力があらうと考へてゐなかつたオルガンチノは、反つて非常な驚きを感じたといふ。

この迫害の間に起つたことで有名なのは細川ガラシヤ夫人の受洗である。夫人は明智光秀の娘であるが、よほど才能のあつた人と見え、禪宗についての理解などはイルマンのコスメを驚かせるほどであつた。キリスト教に興味を持つたのは、夫の忠興が高山右近の親友で、しばしばこの宗教の噂をしたからである。丁度九州征伐で夫の留守中、彼岸の寺まゐりにかこつけて侍女たちの群に混つて宣教師館を訪れた。偶然その日は復活祭日で、會堂が美しく飾つてあつた。その時、名を明かさずに說教を乞ひ、イルマンのコスメの說教を長時間に亙つて聞いたのである。コスメと激しい討論を戰はせたのはこの時であつた。コスメはこれほど物の解る婦人を日本で見たことがないと云つた。それが始まりで、その後侍女を介して說教を聞き質問を續けてゐたが、その侍女が先づ洗禮を受けてマリアとなつた。續いて邸内の主立つた婦人十七人が洗禮を受け、殘るのは夫人のみになつた。その頃に秀吉の宣教師追放令が出たのである。それは夫人を一層熱心にさせた。神父の出發前に洗禮を受けるため、駕籠に乘つて會堂へ忍んで行かう、さう彼女は決心した。神父セスペデスは、時期が時期だけに、それを危んで止めた。さうして、マリアに教へて夫人に洗禮を授けさせた。それがガラシヤ夫人である。だから夫人の信仰は初めから殉教の覺悟と結びついてゐた。

そのやうに追放令は却つて信仰の情熱を高めた。そこで平戸に集まつた宣教師たちは、殉教の覺悟を以て全部日本に留まることを決議した。さうしてポルトガル船長をして秀吉の許に次のやうに報告させた。日本にゐる宣教師は數が多く、到底全部を運ぶことが出來ない。從つて本年は船に收容し得るだけを運び、あとは明年に延ばすことにする、と。その收容し得たのは、シナへ敍品を受けに行くイルマン三人のみであつた。

かうしてヤソ會士は潛伏戰術に出た。その潛伏をひき受けたのはキリシタンの領主である。有馬晴信は全部引き受けようと申出たが、しかしほかの領主へも分けざるを得なかつた。オルガンチノとイルマン二人が小西行長の領内に留まつたほか、あとは西北九州である。度島に四人。大村領内に十二人。豐後に五人。天草島に六人。大矢野に三人。五島に二人。筑後に二人。有馬は最も多く、七十餘人の宣教師と七十三人のセミナリヨの少年をひき受けた。

この潛伏戰術は殉教の覺悟に裏打ちされてゐるのではあるが、しかし秀吉の追放令はやがて緩和されるであらうといふ見とほしをも伴つてゐたのである。さうしてそれは見當違ひでもなかつた。秀吉は宣教師たちが社會の表面から影をひそめ、彼の威光に恐れて萎縮してゐる態度を示してゐる限り、強ひて追放令の嚴格な實施を迫りはしなかつた。從つて潛伏戰術はキリシタン信仰の維持といふ見地から見れば成功だつたとも云へる。それはただに信者たちの信仰を維持し得たのみならず、更にそれを内面化し深化することによつて著しい信仰の發展をさへもたらし得たのである。しかしその代償としてキリスト教が公共的性格を失つたことは十分重視して置かなくてはならぬ。公的な意味においてはヤソ會の宣教師は日本から追放されて一人も殘つてゐないのである。このことは間もなく重大な結果を現はしてくる。

四　キリシタン迫害史

秀吉の宣教師追放令によつて日本のキリシタンの信仰は搖ぎはしなかつた。平然として領地を捨てた高山右近の態度は、數多くのキリシタン武士に通有の態度であつた。黑田孝高に勸められて洗禮を受けた大友義統が、追放令の出たあとで早速迫害を始めたのは、むしろ異例に屬するのである。しかしそれにしてもこの追放令がはつきりと一つの時期を劃することは認めざるを得ない。追放令の出るすぐ前に大村純忠、大友宗麟が相次いで死んだ。その年の末には、日本人イルマン中の傑物ダミヤンが四十四歲で死に、三年の後には、クエリヨも死んだ。シャビエルに見出されて以來、實質的には日本傳道史の上に巨大な仕事を殘した琵琶法師のロレンソも、やゝ遲れて五年後に六十六歲で死んでゐる。九州諸地方の開拓に大きい働きをしたルイス・ダルメイダは、追放令に先立つこと四年、六十歲で、その三十年に近い活動を終つた。それやこれやを思ふと、こゝに世代の變り目があつたともいへるのである。

追放令が出てから三年後、一五九〇年七月にワリニャ

ーニは、ローマへの少年使節を伴つて歸つて來た。少年使節たちはヨーロッパの服裝がすつかり身についた青年になつてゐた。がそれを迎へる日本の情勢もすつかり變つてゐたのである。ワリニャーニはヤソ會の巡察使としてではなく、ポルトガルのインド副王の使節として、翌年秀吉に謁した。ヨーロッパを見て來た青年たちは、多くの大名や武士たちに取り卷かれて、その見聞を物語つた。宣教師は追放しても、ヨーロッパ文明の攝取に對する一般の關心はまだ衰へてゐなかつた。ワリニャーニは布教のことを全然表に出さず、外交家として活動した。それは信仰の情熱に燃えた人々にとつてはまことに齒がゆい態度であつたが、しかしワリニャーニは今こそ忍耐の時であると見てゐたのである。

かくてワリニャーニは潛伏の戰術に積極的な內容を與へた。信者たちは公然たる會堂や儀式を持たずともその信仰を維持し得るやうに「組織」されなくてはならぬ。セミナリヨやコレジヨは人目に立たない山中や島に隱されなくてはならぬ。教へをひそかに人の心に植ゑつけるためには教義書がどし〳〵印刷されなくてはならぬ。ローマから歸つて來た四人の青年は天草のコレジヨで教へ始めた。ワリニャーニの携へて來た印刷機は長崎で、後には天草で、盛んに動き始めた。かうして實質的にヨーロッパの文化が沁み込んで來れば、やがて教會が公共的な性格を取り戻したときに、大きい飛躍が可能となるであらう。これが一五九一年の末にワリニャーニの日本に殘して行つた方針であつた。

しかしこの忍耐强い、地味なやり方は、スペイン人のフランシスコ會の進出によつてかき亂されたのである。

スペイン人がフィリッピン諸島を確保し、太平洋航路を打開したのは、ポルトガル人のゴアやマラッカの確保よりも三四十年づつ遲れてゐた。從つてスペイン人の日本への進出も、丁度それ位は遲れてゐる。ルソンの商船が平戸に入り、スペイン人が初めて日本の地を蹈んだのは、信長の死後二年を經た一五八四年である。その後漸次接觸が出來、一五九一年には原田孫七郎がルソンへ秀吉の勸降狀を持つて行つた。翌年ドミニコ會の宣教師がその眞僞を正すために日本に來て、肥前の名護屋で秀吉に謁し、再び朝貢を促す秀吉の書狀を持つて歸つた。しかるに、その船が歸途難破したために、更にその翌年にフランシスコ會の宣教師ペドロ・バプチスタが使節となり、一人の副使と三人のフランシスコ會士をつれて名護屋に來た。さうして副使が三度目の秀吉の書狀を携へて歸ると共に、使節ほか三人は人質として殘つた。しかし

宣教師たちはそれを在留許可と解し、京大坂方面に行くことを希望したのである。秀吉は布教しないといふ條件で許したが、宣教師たちはかまはずに布教を始めた。次の年一五九四年にまたフランシスコ會の宣教師三人が長官の返事をもたらして京都へ來た。返書は秀吉の注文にまるで愼らないものであつたが、しかしこれで宣教師は七人になつた。

これらの宣教師が盛んに布教活動を始めたのである。一五九四年の秋には京都に會堂が出來た。翌年には病院が出來た。大坂にも會堂が出來た。長崎にもフランシスコ會士を常駐せしめた。これは四十年來日本の開拓に努力して來たヤソ會士にとつては、まことに不快な出來事と云はなくてならない。ヤソ會は教皇から日本布教の獨占權を與へられてゐるのである。しかもその日本の布教は、目下忍耐を必要とする微妙な境遇に追ひ込まれてゐる。拙く動くと根本的な失敗を招くであらう。しかるにフランシスコ會士は、ヤソ會と打合せるでもなく、ヤソ會士が潛伏してゐる機會に、大つぴらに日本の布教事業を奪ひ取らうとしたのである。ヤソ會士は憤らざるを得なかつた。併しフランシスコ會士から見れば、日本のヤソ會士は秀吉の追放令によつて悉く國外に逐はれた筈である。卽ち教皇の許した布教獨占權は事實上消滅してゐるのである。フランシスコ會士はヤソ會士のゐない日本へ來て布教を始めたのであるから、抗議を受ける筈はない、この主張は屁理窟といふほかないであらうが、しかしまた潛伏戰術の急所を射ぬいたものともいへるであらう。ヤソ會士は、抗議を持ち出すためには、おのれの追放令違反を白日の下に曝露しなくてはならない。この窮境に立つて、彼らのフランシスコ會に對する憤懣は一層深まつて行つたのである。

フランシスコ會士の無思慮な活動によつて、日本布教は實に危險な瀨戸際に立たされてゐた。そこへ丁度二つの事件が一緒に起つた。一つは一五九六年八月に最初の日本司教マルチネスが來着したこと、他は同年十月にスペイン船サン・フェリペ號が土佐の浦戸港に入つたことである。

日本に司教を置くことは、大分前から計畫されてゐたが、フランシスコ會の攻勢を憤つたヤソ會は、それに對抗するため急いで實現したのであつた。司教はローマ教會の制度であるから、會派の別なく指揮權を持つことができる。その司教にヤソ會士が任命せられれば、フランシスコ會士の活動をもヤソ會の方針に從つて統制し得るのである。マルチネスはゴアで日本司教に就職し、七人の宣教師をつれてやつた來た。さうして小西行長の斡旋

により、インド副王の使節として、十一月に伏見で秀吉に謁した。

スペイン船サン・フェリペはマニラを發してメキシコへ向ふ途中、颱風で船を破損し、修繕のため浦戸へ入港したのであつたが、船員の保護や修繕の許可を得るため使者を大坂に送つた。その交渉が手間取つてゐる間に秀吉は増田長盛を浦戸に急派して、積荷や船員の所持金を沒收せしめた。その際サン・フェリペ號のパイロットは長盛に世界地圖を見せ、スペイン領土の廣大なことを誇つた。長盛が、どうしてそんなに領土を擴張することが出來たかときくと、彼はそれに答へて、スペインでは先づ宣教師を送つて土人にキリスト教を教へる、ついで信者が相當數に達したとき、軍隊を送つて、信者たちと呼應してその地を占領する、と答へた。このことを長盛が秀吉に報告した、とヤソ會側では主張してゐる。しかしサン・フェリペ號の司令官の報告では、當時京都にゐたポルトガル人たちが、秀吉に向つてスペイン人の侵略を說いたことになつてゐる。スペイン人は海賊である。メキシコ、ペルー、フィリッピン諸島において殘虐な侵略を行つた。日本にも先づフランシスコ會士を派して布教させ、ついでその國を測量する。そのために多額の資金をつぎ込んでゐる。終局の目的は征服である。さう云つてスペイン人を讒したといふのである。丁度その時にインド副王の使節、實は日本司教のマルチネスが來てゐたのであるから、スペイン人のメキシコやペルーの征服のことを語らなかつたとは保證出來ないであらう。さういふ事實をたゞ客觀的に述べただけならば、讒言したとは云へないのであるが、しかしまだ世界的視圏を十分に獲得してゐない日本人にとつては、この事實を聞いただけで、在來の漠然とした杞憂が裏づけられるに十分であつたであらう。キリシタン宣教師たちの企圖は、性格において一向一揆に變りなく、その危險性においては一向一揆以上である。さう秀吉は確信したであらう。

一五九六年十二月九日（文祿五年十月廿日）彈壓がはじまつた。フランシスコ會士六人、日本人ヤソ會士三人、その他日本人信者十七人が京都で捕縛され、京都、伏見、大坂、堺などで市中引き廻しに逢ひ、陸路を九州まで見せ物にして連れて行かれ、一五九七年二月五日、長崎の海岸の小山で死刑に處せられたのである。

これが日本における最初の大殉教であつた。殉教者たちの不屈の態度といひ、爲政者側の「見せしめ」としての故意の殘酷さといひ、日本國中に與へた印象は實に激甚であつた。信者の信仰は狂熱的になり、諸方の領主の壓迫もヒステリックな性格を持ちはじめた。

この年の夏、ルイス・フロイスは、六十五歳で日本における三十四年の活動を閉ぢたのである。その最後の報告は右の二十六殉教者のことであつた。

翌一五九八年夏、新司教セルケイラが巡察使ワリニャーニと共に數人の宣教師をつれてやつて來た。その一月あまり後に、教會の彈壓者秀吉も死んだ。

レオン・パジェスがその大部な『日本切支丹宗門史』（吉田小五郎譯岩波文庫）を丁度この年で以て始めてゐるのは、彼の計畫した日本史の第三卷がこゝから始まるからであつて、日本におけるキリスト教の歷史をこゝから始めてよいと考へたわけではないであらうが、しかしまた「迫害」がキリスト教徒の完成に缺くべからざる條件であるといふ見地から見れば、日本のキリスト教史は、このあたりから眞にキリスト教史になつてくるともいへるであらう。しかし、こゝで問題としてゐるのは、キリスト教史ではなくして、日本民族が何故に世界的視圏を獲得し得ず、從つて、近世の世界の仲間入りをなし得なかつたかといふことである。この見地から見れば、この後の日本キリスト教史は、鎖國の形勢を激成して行く過程にほかならない。

勿論このことはキリシタンの運動が日本人の視圏を擴げるやうな要素を持たなかつたといふことではない。秀吉死後の十數年間、即ち慶長年間には、舶來の印刷術のお蔭で、ローマ字綴りのキリシタン書が多數出版されたし、またキリシタン書以外にも語學書や文藝の書が出版されてゐる。『日葡辭典』やロドリゲスの『日本文典』が出たのはこの頃であるし、『妙貞問答』や『舞の本』が出たのもさうである。日本側の舞の本などがほとんど假名ばかりで書かれてゐた時代であるから、それを口語の對話にひきなほしローマ字で綴つても、その移り行きは極めてなだらかで、大した困難もなくローマ字の採用が行はれ得たのであつた。これらの點から見れば、慶長年間はまだまだ廣い世界への接近の傾向を持つてゐたと云へなくはないであらう。

しかしこれらはすべて「餘勢」であつて、隆盛期に張つた根がいかに深くまた廣く諸方に及んでゐたかを示すに過ぎないのである。キリシタン側の文化的活動も著しかつたに相違ないが、それに對抗する保守的な文化活動はさらに一層强力に押し進められてゐた。秀吉が下から盛り上つてくる力を抑へて、現狀を固定させようとする方向に轉じたとき、この大勢は定まつたのである。家康はこの大勢に添ひ、それを完成して行つたのであつて、その點で決して迷つてはゐない。

しかし秀吉が貿易だけは保存しようとしたやうに、家康もまた西洋人との貿易には熱心であつた。さうしてこの貿易を宣教師の布教運動から引き離すのが困難であることも知つてゐた。だから彼はキリスト教に對しては、初めから、公認はしないが大目に見る、といふ態度で一貫してゐる。秀吉の死後、諸方で會堂や宣教師館が回復され、殊に小西行長の領地肥後では數多くの新設を見たのであつたが、それらは問題にされなかつた。だから秀吉死後の數年間には、信者が七萬殖えたといはれる程である。

この形勢に最初の變化をもたらしたのは、一六〇〇年（慶長五年）の關ケ原の戰である。それによつて德川の覇權が確立するとともに、小西行長、小早川秀秋などのキリシタン大名が亡んだ。特に小西行長の喪失はキリスト教にとつて大きい打擊であつた。しかしそれだけならばまだ大したことではない。キリシタン大名でも大村、有馬、黑田などは德川方に附いてゐたし、德川方の有力な諸大名、細川、前田、福島、淺野、蜂須賀などはキリシタンの同情者であつた。重要なのはむしろキリシタン迫害が大名の間の主要な潮流となり、諸大名が漸次態度を變へるに至つたことである。迫害の先驅者は、小西行長の個人的な敵で、小西の領地を引きついだ法華信者加藤淸正であつた。彼の迫害によつて肥後の八萬の信者は二三年の間に二萬に減つたといはれてゐる。それについで迫害をはじめたのは、小西領であつた天草島、長門の毛利などである。筑前の黑田孝高はその大勢に反抗してキリスト教を盛んにしてゐたが、一六〇四年に歿して長政が後を嗣いでからは、漸次形勢が變り、遂に長政の棄教を見るに至つた。豐前の細川忠興も關ケ原戰の際に犧牲になつたガラシヤ夫人の思ひ出のためにキリシタンを保護してゐたが、それは十年以上は續かなかつた。大村領は長崎が幕府の直轄地となつた關係から直接に幕府の壓迫を受け、大村喜前（よしあき）は逸早く棄教した。たゞ有馬晴信のみは夫人と共に熱心に信仰のために盡し、教勢の擴張を計つてゐたが、その彼も一六一二年には遂に流罪に處せられたのである。

しかし政治の表面に現はれたこの大勢は必ずしもその〻キリスト教信者の間の大勢ではなかつた。武裝を解除された民衆が何を信じようと、それは初めの内はさほど問題ではなかつた。だから宣教師たちも、公然たる宣教を控へつゝ、内實において信者の組織に努力し、教育をすゝめ、信仰書の出版を盛んにして、教勢の維持や擴張を計つたのである。その間、特に著しいのは日本司教セルケイラの活躍であつた。彼は一方において布教事業

の公認を再び獲得することに努めると共に、他方においてスペインの勢力との對抗、即ちフランシスコ會、ドミニコ會、アゴスチノ會などの進出を抑へることに苦心した。このスペイン側の宣教師たちは、一五九六年の大殉教にもひるまず、依然として日本進出に努力し、一六〇二年の如きは、マニラから渡來するもの十五人に達したのである。セルケイラはその年の秋マニラに書簡を送つて、このやうな行動がいかに危險であるかを警告してゐる。第一、家康はキリスト教を好まず、佛教に熱心である。貿易の必要から宣教師の滯在を大目に見てゐるが、公認してゐるのではない。第二、家康初め諸大名はスペイン人が侵略者であり、布教は侵略の手段に過ぎぬと信じてゐる。これらの理由によつて、スペイン宣教師の大擧來日は、教會に對する迫害を激發する怖れがある。その徵候はすでに顯著だといつてよい。家康は宣教師の到着に關して、「あいつらはまたはりつけになりたくて來たのか」と云つたといふ。側近の高僧（相國寺の承兌）の策動で、毛利の山口、細川の小倉、黑田の博多などには、すでに迫害が起り、或はまさに起らうとしてゐる。この調子で行くと大殉教のやうなことがまた起らないとも限らない。だからスペイン宣教師の無思慮な行動は實に危險である、といふのであつた。

セルケイラの態度は、出來るだけ控へ目にしてゐて家康以下諸大名の疑念を解き、布教公認を取り戻さうといふのであつて、巡察使ワリニャーニと相談して立てた方針を守つてゐるのである。ワリニャーニがセルケイラたちと共に三度目に日本を訪れたのは一五九八年の夏であつて、着くと間もなく秀吉が死んだのであるが、その死に先立つて先づ着手したのは奴隷賣買問題の解決であつた。この問題は秀吉の追放令の中で最も手ひどく教會にこたへたものである。追放令發布の當時クエリヨは、日本人が賣るから惡い、そちらで禁止したら好からうと秀吉に答へたのであつたが、ワリニャーニとセルケイラは、ポルトガル商人に奴隷賣買を禁ずる態度を明かにしたのである。この禁令は最初の日本司教マルチネスが既に着手してゐたが、まだ實現されずにあつたのである。これはキリスト教徒としては當然の態度であるが、しかしポルトガル商人の利益を制限する意味において、相當困難な仕事であつた。それだけに追放令緩和に役立つ筈でもあつた。ついで秀吉の死後には、ワリニャーニは、以前大坂にゐたロドリゲスを連れて、禁壓緩和の運動に大坂へ出たりなどした。諸大名には同情者もあり、うまく行くやうに見えてゐたが、そのうち關ケ原の戰爭が起り、小西行長の滅亡その他事情の變化で、問題は非常に

デリケートになつてゐた。丁度そこをスペインの宣教師たちが搔き廻し始めたのである。ワリニャーニはその頃に日本を去つたらしいが、セルケイラはこのワリニャーニの忍耐强い宥和政策を受けついだのであつた。

一六〇六年にセルケイラは伏見に來て家康に謁した。ポルトガルの使節といふ資格であるから、旅行は公式であつたし、謁見式も公式であつた。しかし實質的にはセルケイラは、司教の正裝で家康に會ひ、司教として信者たちに接した。また近侍の本多正純や京都所司代の板倉勝重には、布教の自由についていろ〳〵と懇請したらしい。翌年にも管區長パエスを駿府に送つて同じやうに運動を續けてゐる。パエスは江戸にも行つて將軍秀忠に謁した。本多正信正純父子が親切に世話をした。布教の公認についても何となく希望があるやうに見えてゐた。

このセルケイラの方針をいつも脅かしてゐたのはスペインの宣教師たちであつたが、しかしそのほかにもう一つ手ごはい敵が現はれて來たことを見のがしてはならない。それは新教國民たるオランダ人とイギリス人とである。

ヨーロッパを眞二つに分裂させた宗教改革は、十七世紀の初めにはます〳〵深刻な影響を現はしてゐた。信仰の自由を守るために北アメリカに移つて行くピューリタンたちがもうそろ〳〵動き出しさうになつてゐた頃である。新教と舊教との對立が織り混つて、あの執拗な抗爭を續けた三十年戰爭も、もう萌し始めてゐた。新大陸の發見以來急激に興隆した舊教國スペインは、一五八八年の無敵艦隊敗滅以來、ヨーロッパの覇權への望を捨てて降り坂になつた。それとともに、ローマ教會と絶つて新教に妥協したイギリスが、海上の雄者になつて來た。新教を容れたオランダは、その前からスペイン王に離反して獨立のために戰つてゐたが、今やその獨立を殆んど完成しようとし、イギリスに對抗し得る海國となつた。このヨーロッパの形勢は、間もなく東洋の海上へ響いて來たのである。

その最初の現はれは、一六〇〇年四月、豐後に漂着したオランダ船リーフデ號であつた。初めは五隻の艦隊の内の一隻であり、百十人の乘組員を持つてゐたのであるが、途中散々な目に逢つて、生存船員僅か二十四人で、たゞ一隻豐後に着いたのである。しかも歩けるのはパイロットのイギリス人ウィリアム・アダムス以下六人だけで、三人は上陸の翌日死んだ。オランダが遠征艦隊を出し始めてからやつと五年目、東インド會社が出來る二年前のことであるから、まだ東洋への航海は不慣れだつたのである。

アダムスが大坂城で家康に會つたのはヨーロッパの舊曆五月十二日（慶長五年四月十日）で、關ヶ原役の五ヶ月前であつた。家康はアダムスからオランダの獨立戰爭の事や、マゼラン海峽を通過し太平洋を横ぎる世界航路の事を聞いたのであるが、これまで舊教の宣教師ばかりを見てゐた家康の眼には、この俗人の航海者がよほど違つて見えたであらう。彼はリーフデ號を浦賀に回航させ、アダムスに俸給を與へて好遇した。その結果五六年後にはオランダの東インド會社と聯絡を取ることが出來、一六〇九年七月、二艘のオランダ船が平戸に入港するに至つたのである。そこで兩船の商人頭が使節として駿府に行き、オランダのオレンヂ公の書簡を家康に呈した。家康は通航免許狀を與へ、また商館の設置を許した。商館設立のこともまた、家康には在來の宣教師のやり方と異なつて見えた點であらう。その秋には平戸にオランダの商館が出來、ジャックス・スペックスが商館長として數人の館員と共に駐在することになつた。

かうしていよ〳〵、オランダ貿易が始まつたのであるが、半世紀以上に亙るポルトガル人の貿易や、最近にマニラから日本に進出して最も地の利を得てゐるスペイン人の貿易などと競爭するのは容易でなかつた。スペックスは非常に努力して、二年後の一六一一年七月に自分の手で第二船を入れ、アダムスと打合せて駿府に行つた。スペインやポルトガルの使節もその少し前に駿府を訪れたのであるから、云はば三國は鎬を削るといふ狀態になつてゐた。しかるにオランダ商館長スペックスのみは、アダムスの斡旋で、まるで別格の取扱ひを受け、家康と親しく貿易の話をすることが出來たのである。スペックスはそのあとで江戸に出で、浦賀に廻つたが、そこでスペインの使節と落ち合つたにかゝはらず、いづれも會はうとはしなかつた。本國の敵對關係がこゝまで響いてゐたのである。

かういふ競爭に際して、スペイン人やポルトガル人は、オランダ人が叛逆者であり海賊であることを攻擊した。オランダがスペインからの獨立のために戰つてゐたこと、海上で敵船の捕獲や掠奪をやつてゐたことは、いづれも事實である。それに對してオランダ人や家康側近のイギリス人アダムスが、過去一世紀に亙るポルトガル人やスペイン人のインド及びアメリカにおける殘虐な征服行爲を擧げて對抗したことも、推測するに難くない。ポルトガル人及びスペイン人は世界的視圈を開くといふ非常な功績を擧げたのではあるが、その點を抑へてたゞ暗い半面のみを物語れば、さういふ事實の報告のみを以てしても、ポルトガル人とスペイン人とを日本から

遠ざけることは出來たのである。

このやり方はやがて公的な表現にまで達してゐる。一六一二年八月にオランダから來た船の商人頭ヘンドリック・ブルーワーは、國主モーリッツの書簡を携へて駿府に行つたのであるが、その書簡には、ヤソ會の宣教師が表に布教を裝ひつゝ、內實においては改宗による國民の分裂、黨爭、內亂をねらつてゐる、と明白に認めてゐるのである。これはもう個人的な蔭口ではない。反動改革者に對する新教徒の公然たる攻擊なのである。

この趨勢を心から憂へてゐたのは、セルケイラであつた。彼はスペイン國王に對してオランダ人の危險を頻りに訴へてゐる。またオランダ人の策動を有效ならしめるやうなスペイン宣教師の無思慮な行動をも訴へてゐる。しかしもう遲かつた。迫害はすでに一六一二年の春、家康の膝下駿府において始められたのである。

一六一二年四月（慶長十七年三月）家康は京都所司代板倉勝重にキリスト教會堂の破却を命ずると共に、駿府の旗下武士のうちの信者十數人を檢擧した。檢擧はなほ夏まで續き、大奧の女中にまで及んだ。この禁教令は有馬晴信の處刑と聯絡があるらしく、發布の直前に晴信の喧嘩相手岡本大八が火刑に處せられたし、また駿府での檢擧と同時に有馬領での禁教が勵行された。

一六一三年、江戸で、キリシタンの檢擧が行はれた。スペイン宣教師の經營してゐた淺草の癩病院も閉ざされた。七月に至つて、檢擧せられたものの內二十七人が死刑に處せられた。四五年來メキシコ通商のことで幕府の役人との間に山師的に活動してゐたフランシスコ會士ルイス・ソテロも、この時には信者と共に捕へられてゐたのであるが、巧みに出獄して伊達政宗に取り入り、この年の十月には支倉常長（はせくら）たちをつれて日本を出發した。がこれもソテロの山師的な計畫によるものであつて、日本における大きい社會的情勢の現はれではなかつた。

一六一四年一月二十八日（慶長十八年十二月十九日）家康はキリスト教嚴禁、宣教師追放の政策を決定し、大久保忠隣（たゞちか）をその追放使に任じた。家康のこの決定には南禪寺金地院崇傳の進言が有力に働いてゐるといはれる。しかし、數日後に發表された崇傳の禁教趣意書は、嚴めしい漢文で長々と書かれてはゐるが、「キリシタンは神敵佛敵である。急いで禁壓しなければ國家に害があるだらう」といふことを主張してゐるだけである。何故特にこの際追放令を出す必要があるか、キリスト教のどの點が國家を害するか、などについては、何事も語つてゐない。その與へる印象は、宗派的な偏執と陰慘な憎惡とのみである。即ち

家康の頭腦としての崇傳自身が、すでにキリシタンを說得しようとする理性的な態度を持つてゐないのである。從つて禁教がたゞ武力による壓迫となつたのは當然といはなくてはならぬ。

大久保忠隣は二月二十五日（慶長十九年一月十七日）に京都に着き、翌日から會堂の燒却・破壞、信者の捕縛、轉宗の强要などを始めた。棄教轉宗を肯んじないものは、俵に入れてころべころべと囃しながら轉がして歩いた。女の信者に對しては裸體で晒らすこと、遊女にすることなどで脅かした。さらに頑固なものは火刑にするといつて、四條河原に十字架を建て列ねた。京都の町は陰慘な空氣に包まれてしまつたのである。

しかしこの狂氣じみた迫害は長くは續かなかつた。二月二十七日には大久保忠隣自身が領地沒收の宣告を受け、その命令が三月十日に京都に着いたのである。そこで跡始末は賢明な京都所司代板倉勝重によつてなされたのであるが、勝重はその前からすでに追放や流罪の穩やかな策を立て、外國人宣教師に對しては大久保が京都に着くよりも二週間前に退京を命じ、伏見、大坂にゐた人人と併せて、船で長崎の方へ送り出したのであつた。從つて殘る問題は、日本人信者で改宗を肯んじないものの追放である。加賀の前田家に預けられてゐた高山右近の一群、內藤ジョアンの一群などは、四月十五日に加賀を立つて、京都でジョアンの妹のジュリヤたちの群と合して長崎に向つた。日本にゐなければよいので、殺す必要はないではないか、といふのが勝重の方針であつた。

長崎へは諸方の追放者が集まり、だん〳〵感情が激して受難覺悟の行列なども繰り返されたが、幕府の官吏は諸大名の兵を集めて嚴戒しつゝ、會堂の破壞燒打ちを斷行し、十一月に至つて四百餘人のキリシタンを海外に送り出した。高山右近はマニラで翌年死んだが、內藤兄妹はなほ十二三年生きてゐた。

この大追放は、しかし、キリシタン宣教師の三分の二を國外に送り出し得たに過ぎなかつた。潛伏し殘つた宣教師は、諸會派併せて四十數人に達してゐる。しかも翌年からしてすでに潛入歸來が始まつてゐるのである。

右の大追放の際に、九州の諸大名は特に嚴重に禁教を實行する樣命ぜられた。中でも、大村、細川、黑田などは、よほど熱心に努力しなくてはならなかつた。しかし殘虐な處刑はまだ行はれてゐない。たゞ一つの例外は有馬領である。幕府は、棄教した領主直純を日向に移したが、家臣の殆んど全部はキリシタンで、棄教した領主に附いて行かうとせず、浪人してもとの土地に留まつた。

このキリシタンの態度が新領主を恐れさせたのみならずまた幕府をも驚かせた。そこで大追放斷行のために長崎に集まつてゐた陣容と兵力とを用ゐて、徹底的なキリシタン探索、殘忍な拷問や處刑を行つたのであつた。つまり有馬の家臣らの固い信仰、強い操守が、迫害の殘虐化を誘發したのである。

この關係はこの後の迫害史に一層擴大されて現はれてくる。大追放でキリシタンを斷絶し得たと見えたのはただ表面だけのことで、殉教を恐れない宣教師はなほ多數潜伏してゐる。それに加へて毎年勇敢な潜入者が續々とやつてくる。幕府を最も強く刺戟したのはこの潜入であつた。それも初めの内はおもにヤソ會士で、單獨に、隙をねらつて潜入したのであつたが、一六一八年頃から、ヤソ會以外の宣教師たちが、團體的、計畫的に潜入するやうになつたのである。それは前の年に大村で殉教した二人の宣教師の話が、マニラのスペイン人たちの間に殉教熱を煽つたからであつた。第一回は七人、翌年の第二回は五人。ついで一六二〇年の第三回は、人數はたゞ二人であつたが、その引き起した事件によつて當局の注目をひいた。アゴスチノ會のズニガとドミニコ會のフロレスとで、堺のキリシタン平山常陳の船に隱れて日本へ潜入する途中イギリス船に捕獲され、オランダ船に引渡されて平戸へ連れて來られたのである。オランダ人はこの捕獲が海賊行爲でないことを立證するために、乘員中に宣教師がゐることを主張した。しかし、ズニガとフロレスとは宣教師でないと云ひ張つた。そこで面倒な係爭問題が起つたのである。オランダ人はその立場を守るために、二人に殘忍な拷問をも加へたらしい。この爭は長崎奉行の前でスペイン人とオランダ人が互に非難し合ふといふ場面をも展開した。スペイン人はオランダ人の叛逆と海賊行爲とを指摘し、オランダ人はスペイン人のペルーやメキシコの征服を指摘した。が結局先づズニガが自白し、それを潜入させた罪で船長平山常陳以下船員十數名が投獄され、最後にフロレスも自白した。彼らが長崎で處刑されたのは一六二二年の八月である。

マニラからの潜入はまだこの後にも續々として行はれたのであるが、しかし右の處刑の頃までに既に十分にキリシタン迫害への拍車の效用を發揮してゐた。宣教師の潜入は、直接にはそれを助ける外國航路船やその船員の取締りを嚴格ならしめたが、同時に日本に潜入してゐる宣教師との聯絡や、彼らをかくまひ潜伏せしめる國内信者の存在をも曝露したのである。そこで、この刺戟がなければ穩やかに祕やかに存在し續けることの出來たかも知れない信者たちを、洗ひ立て、檢擧し、處刑するといふ氣運が生じて來たのである。

その最初の現はれは、マニラからの第一回潜入のあつた翌年、一六一九年（元和五年）の京都における大殉教であつた。家康死後三年であるが、金地院崇傳の勢力は依然として盛んであつた。出來るだけ溫和な取扱ひをしようとしてゐた板倉勝重も、遂にその力に押されて、富豪桔梗屋ジョアンの一家を初め、信者六十三人を逮捕したのである。さうして刑の輕減の努力も效なく、この年の十月初めに、將軍の命によつて、獄死を脫れた男女小兒五十二人を七條河原で火刑に處した。

次に著しいのは、一六二二年の長崎立山の大殉教である。一六一八年の秋以來、マニラからの潜入者及びその連累が續々と捕へられ、宣教師格のものは壹岐や大村の牢獄に、宿主や五人組の連坐者は長崎の牢獄に繫がれた。獄死したものも多かつたが、後者の内には次々に殺されたものもあつた。しかしそれでも入牢者はだん〳〵殖えて行つたのである。その處分が一六二二年の夏頃から行はれたのであつた。前述のズニガ、フロレス、平山船長の三人が火刑、船員十名乘客二名が斬罪に處せられたのは、八月十九日であつたが、ついで九月十日（元和八年八月五日）に、數年來たまつてゐた宣教師及び信者五十五人が、長崎の立山で、火刑と斬罪に處せられた。これが「大殉教」と呼ばれるものである。しかし處刑はそれで終らず、二日後に、宣教師など十八人が大村の山中の人里離れた所で刑の執行を受け、つゞいて長崎附近の諸處で、同樣の處刑が續行された。全體では百數十人に達するであらう。

ついで一六二三年、家光が將軍となつた年には、江戸で、原主水、ヤソ會のアンゼリス、フランシスコ會のガルベス以下五十人のキリシタンが、悉く火刑に處せられた。少しあとでそれらの人の妻子など二十六人（或は四十三人）が同じく火あぶりになつた。なほこの年には仙臺でも三十六人處刑されたらしい。

翌一六二四年には東北地方の迫害が續き、仙臺と秋田とで多數のキリシタンが處刑された。

一六二六年は、家光の政策が長崎へ響いて來た年である。ヤソ會の宣教師九人の火刑を初めとして、有馬における殘忍を極めた拷問苛責が開始された。溫泉（うんぜん）岳の火口がそのために用ゐられた。熱湯に浸して苦しめるのである。が殉教者たちは、その苦しみを見せつけられても、退轉しようとはしなかつた。最も猛烈であつたのは二年位であるが、しかしこの殘忍な方法は一六三一年までは續けられたのである。それは思想や信仰の力に對する、武力のヒステリーだといつてよい。

一六二九年頃から東北の方でまた迫害が烈しくなつてゐるが、長崎の方でも一六三三年には、多數の宣教師や信者が「穴つるし」にされた。連年の多量な火あぶりがまだ手ぬるく感ぜられて來たのであらう。

五　鎖　國

宣教師追放令を出した秀吉も、禁教令を發布した家康も、鎖國を考へてゐたわけではなかつた。秀吉の追放令には貿易の自由をわざ〳〵掲げてゐるし、家康は禁教令に先立つてオランダ貿易を始めてゐる。しかし十六世紀末十七世紀初頭のヨーロッパの文明を攝取したいと考へつゝ、そこからキリスト教だけを捨てて取らないといふやうなことは、到底出來るわけのものではない。そこには教會の羈絆を脱した近世の精神が力強く動いてゐたとしても、ヨーロッパ人自身すら、それを純粹に取り出すことは出來なかつた時代である。その近世の精神に參與し得るためには、それと絡み合つたものをも一緒に取り入れなくてはならなかつた。さうしてそのためには當時の日本人は極めて都合のよい狀況を作り出してゐたのである。古い傳統の殼は打ち碎かれた。因襲にとらはれない新鮮な活力は民衆のなかから湧き上つて來た。室町時代末期の民衆の間に行はれた文藝の作品――ほとんど假名文字ばかりで書かれ、漢學や漢字の束縛を最少量にしか示してゐないあの物語や舞の本の類――は、今見ると實に驚かされるやうな想像力の働きを見せてゐる。死んで甦る神の物語もあれば、美しいものの脆さを具象化したやうな英雄の物語もある。あゝいふ書物を讀み、あゝいふ想像力を働かせてゐた人々の間に、ローマ字書きが擴まり、舊約や新約の物語が受け入れられるといふことは、いかにも自然なことであつたと考へられる。のみならず、當時の日本人の強い知識欲に應へるために、反動改革の急先鋒であつたヤソ會士さへも、日本では、近世初頭に急激に發展した自然科學の知識を振り廻したのである。關ヶ原戰後の京都においてさへも、神父の天文や地理に關する話をきき、天體圖や地球儀を見せて貰ひに來るものが非常に多かつたといふ。地球儀は內裏からも所望され、秀賴も興味を持つたと傳へられてゐる。一六〇五年から京都にゐたスピノラは、數學や天文學に通じてゐて、京都の學者たちを集め、アカデミー風のものを作つたりなどした。つまりキリスト教の傳道は當時のヨーロッパ文明を全面的に傳へる意味をも持つてゐたのである。さうしてまた、その故に宣教師たちに引きつけられた人々も決して少なくはなかつたのである。だからこの際宣教師を追放しキリスト教を禁ずるといふことは、

民衆の中から湧き上つて來た新しい力、新しい傾向を押へつけ、故意にそれを古い軌道へ歸すといふことにほかならなかつた。

これは純然たる保守的運動である。それは秀吉が民衆の武裝解除をやつたときに、はつきりと開始された。農民の子から關白にまでのし上つた秀吉自身は、傳統の破壞、從つて保守の正反對を具現してゐたにかゝはらず、自分がその運動を完成したときに突如として反對のものに轉化し、保守的運動を强力に開始したのである。それは一世紀以來の赤裸々な實力競爭において、新興の武士團が勝利を得ると共に、その勝利を確保し、武力の支配を固定させる努力にほかならなかつた。この努力において主として眼中に置かれたのは、國內の敵を制壓することであつて、日本民族の運命でもなければ、未知の世界の開明や世界的視圈の獲得でもなかつた。秀吉は氣宇が雄大であつたといはれるが、その視圈は極めて狹く、知力の優越を理解してゐない。彼ほどの權力を以てして、良き頭腦を周圍に集め得なかつたことが、その證據である。彼のシナ遠征の計畫の如きも、必要なだけの認識を伴はない、盲目的衝動的なものである。彼はポルトガル人の航海術の優秀なことも、大砲の威力も、十分に承知してゐた。しかも、その技術を獲得する努力をしなかつた。國內の敵しか彼の眼には映らなかつたからである。結局彼もまた國內の支配權を獲得するために國際關係を手段として用ゐるやうな軍人の一人に過ぎなかつた。

家康はこの保守的運動を着實に遂行した人である。彼はそのために一度破壞された傳統を復興し、佛教と儒教とをこの保守的運動の基礎づけとして用ゐた。特に儒教の興隆は、彼が武士の支配の制度化の支へとして意を用ゐたところであつた。かくして近世の精神が既にフランシス・ベーコンとして現はれてゐる時代に、二千年前の古代シナの社會に卽した思想が、政治や制度の指導精神として用ゐられるに至つたのである。それは國內の秩序を確立する上に最も賢明な方法であつたかも知れない。しかし、世界における日本民族の地位を確立するためには、最も不幸な方法であつた。彼もまた國內の支配權を確保するために國際關係を犧牲にして顧みなかつた軍人の一人である。

これらはすべて世界的視圈をおのれのものとなし得なかつたことの結果である。さうしてそれが、世界的視圈を初めて開いたポルトガル人とスペイン人との刺戟の結果であることは、まことに皮肉な現象だといはなくてはならない。宣教師たちの報告によると、日本の武士たちは、スペイン人の侵略の意圖を云ひ立てはしたが、自分

たちの武力には自信を持ち、決してスペイン人には敗けないと思つてゐたといふ。秀吉がマニラ總督に朝貢を要求したほどであるから、これは本當であらう。それほどの自信があるなら、侵略の意圖などには恐れずに、ヨーロッパ文明を全面的に受け入れれば好かつたのである。近世を開始した大きい發明、羅針盤・火藥・印刷術などは、すべて日本人に知られてゐる。それを活用してヨーロッパ人に追ひつく努力をすれば、まださほどひどく後れてゐなかつた當時としては、近世の世界の仲間入りは困難ではなかつたのである。それをなし得なかつたのは、スペイン人ほどの冒險的精神がなかつた故であらう。さうしてその缺如は視界の狹小に基くであらう。

その視界の狹小は、宣教師やキリシタンの迫害が進むに從つて、ます〳〵その度を加へた。單純に武力を以て思想や信仰に對抗する場合には、武力はそれ自身の無力を見せつけられてだん〳〵ヒステリックになる。おのれの無力を承認しようとせず、一層その力を證示しようと努めるからである。スペイン人の冒險的精神が宣教師の殉教熱となつて日本の岸にうち寄せ、日本人のなかの背骨の固い信者たちが同じ殉教熱を以て武力に對抗したとき、武力は實際何の效果もなかつた。武力はたゞ彼らの生命を奪ひ得るだけであつた。しかし武力の威光を示さうとする人々は、あらゆる殘虐な殺し方を工夫することによつて、それに對抗した。さういふ陰慘な氣持は、理非もなくキリスト教への憎惡を高めて行く。その結果、貿易を安全に續けるための手段であつた禁教が、逆に貿易をもさま〳〵の形で制限する目的の地位を占めるに至つたのである。

丁度この頃は新しく極東に進出したオランダとイギリスとの勢力が、在來のポルトガルとスペインの勢力に對して激しい競爭を敢行してゐる時であつた。その間に日本の勢力も絡まり、三つ巴、四つ巴となつて極東の海上には連年さま〳〵の事件を引き起した。その中にオランダ人とイギリス人との衝突、日本人とオランダ人との衝突なども入り混り、決して單純な關係ではないが、しかし大體においてポルトガルとスペインの勢力が後退して行つたのである。ポルトガル人に對する居住の制限、婚姻の制限、碇泊期間の制限などはその現はれであつた。やがて一六二八年には、マニラ艦隊がシャムで日本商船を捕獲した事件が起り、その報復として、同一君主の支配下にあるといふ理由で、ポルトガル船三隻を長崎で抑留するといふやうなこともあつた。

さういふ情勢の下に、一六三三年には長崎奉行に對してかなり嚴しい外國貿易取締令が通達された。御朱印船以外の船の外國渡航の嚴禁、五年以上外國居住の日本人の歸朝の禁止、外國船の輸入品の統制、外國船碇泊期間の短縮などを規定したものである。この法令は、翌年にも繰り返して發布され、翌々年には改正して發布されたが、さらに一六三六年（寛永十三年）に一層嚴格にした形で發布された。これが通例、鎖國令と呼ばれてゐるものである。こゝでは、御朱印船をも含めて、一切の日本船の外國渡航の禁止、一切の日本人の外國渡航の禁止、一切の外國居住日本人の歸朝禁止、混血兒の追放、追放された混血兒の歸來及び文通の嚴禁、その他前とほゞ同樣の外國船及びその輸入品の統制を規定してゐる。貿易を認めてゐる以上、嚴密な意味で鎖國令とは云へないのであるが、然し日本人に對して外國との交通を遮斷したといふ點においては、鎖國令に相違ないのである。海外へ連れて行かれた混血兒が、日本にゐる親類へ文通した場合には、本人は死罪、受取つた親類も處刑される。それほどにまで外國との交通を恐れたのである。

この法令は着々實行に移されたが、しかし長崎奉行が實現したのはこゝに規定された範圍に止まらなかつた。前に記したポルトガル船抑留事件に聯關して渡來したマカオの使節ドン・ゴンサロ・ダ・シルベイラは、執拗に努力を續けて一六三四年に將軍に謁見することが出來、その翌年には三隻、翌々年には四隻を率ゐて渡來したのであるが、この一六三六年の來航の際には、長崎に着くと共に、乘組員八百名も積荷も嚴重な檢査を受け、船の帆や舵は取り上げられ、船員一同は新築の出島に隔離された。この出島は、ポルトガル人と日本人との交通を遮斷するために、長崎の海岸に作つた埋立地である。貿易のため外國船が日本に來ても、日本人と外國との交通は絶つことが出來る。さういふ考をこの狹い埋立地が具體化してゐるのである。

ドン・ゴンサロの四隻の船が長崎を出發する時には、混血兒二百八十七人を乘せて去つた。

この鎖國令を一層强固ならしめたのは、翌一六三七年末に起つた島原の亂であつた。

島原の亂の爆發した直接の動機は、信仰の迫害ではなくして苛政であつた。しかし爆發する力を蓄積して行つたのはやはりキリシタン迫害である。島原半島の地はこの二十年來、想像に餘るやうな殘酷な迫害の血の浸み込んだところであつた。殉教者は無抵抗の方針を堅持して來たが、それが心理的に與へた效果はむしろ逆である。それに加へて迫害者たちは、明白なキリシタンに對してのみ殘虐であつて一般領民には仁慈である、といふ如き區別の出來る人たちではなかつた。迫害の心理はやがて

彼らを暴虐な爲政者たらしめる。さういふ爲政者の下にある下級官吏は、一般領民に對して一層苛酷な態度を取ることになる。從つて、祕かに信仰を維持してゐる民衆も、さうでない人たちも、その內心の反抗においては一つであつた。その氣運のなかで、小西の遺臣の子、天草四郎時貞といふ十六歲の少年に、特別の天命が下つたといふ風の信仰が燃え上つて來たのである。

丁度その頃、一六三七年の十二月の中頃に、或る村で下級官吏の橫暴から村民が憤つて代官を殺すといふ事件が起つた。それは忽ち傳染し、他の村々でも代官が殺された。一揆が蜂起したのである。一揆は領主の城島原を圍んだ。さうして城主の米倉を占領し、領內の米を集めて、原城に據り、四萬に近い人數を以て三ケ月間討伐軍に抵抗した。天草島でも十日ほど遲れて蜂起し、領主の兵を破つて富岡に迫つたが、城を拔くことが出來ず、原城の一揆に合流した。

叛亂軍は信仰の情熱に燃え、恐ろしく强かつた。最初幕府から向けられた討伐軍の指揮官板倉內膳正は、原城攻略に失敗して、一六三八年二月十四日に戰死した。二度目の指揮官松平伊豆守は、攻圍軍を十數萬に增し、オランダ船に賴んで、十六日間砲擊して貰つたりなどしたが、大して效果はなかつた。結局糧食の缺乏によつて、四月十一、十二日の總攻擊に陷落したのである。女子供を合せて三萬七千といはれた籠城のキリシタンは、全部殺戮された。

このキリシタンの抵抗力は、武士たちを驚かせたと共に、また彼らのキリシタン憎惡を强め、禁敎政策に對する信念を固くした。外國との交通は徹底的に禁壓しなくてはならぬ。そこでこの後數年の間、禁敎と鎖國との法令制度が續々として制定されたのである。

ポルトガル人の貿易も、島原の亂の平定の年、一六三八年が最後であつた。亂後の處置に、江戶から派遣された太田備中守は、一六三九年九月二日、ポルトガル人追放、ポルトガル船來航禁止を云ひ渡した。理由は宣敎師に對する援助である。その年來航したポルトガル船は即時追ひ返され、翌年通商再開の嘆願に來たマカオの使節一行は、大部分死刑に處せられた。

あとに殘つたオランダ商人は、いよ〳〵日本貿易の獨占を祝つたのであつたが、一六四〇年十一月七日、大目附井上筑後守から商館破壞の命令を受けた。その理由はオランダ人もまたキリスト敎徒であること、商館の建物にヤソ紀元の年號が記されてゐることである。それと同時に日曜日を守ることの禁止、商館長の年々交代などが命ぜられた。右の商館の建物は、オランダ人が長崎移轉

を不利なりと考へた程、多額の費用のかゝつたものであつたが、商館長は當局の斷乎たる態度を見て、その夜から徹夜で破壞工作に取りかゝつた。この從順な態度がオランダ貿易を救つたといはれてゐる。

翌年オランダ商館は長崎への移轉を命ぜられた。前年の商館破壞命令は、この移轉を容易ならしめるためであつたのである。かくしてオランダ人は、この後二百年の間、長崎の出島に閉ぢ込められた。さうしてその出島が日本人と外國との交通の象徵となつた。

このやうに鎖國の形成が完成するまでには、秀吉の宣敎師追放令以來四十五年、家康の禁敎令からでも二十七八年を要してゐる。その間に爲政者の側でのキリスト敎に對する憎惡が漸次高まり、遂に海外との交通そのものを恐れるに至つたのであるが、しかしそれは國內での支配權獲得の欲望が他の文化的欲求や近世的動きに優越してゐたことを示すのみであつて、國民の間に外に向ふ衝動がなかつたことを證示するものではない。一六〇四年から一六一六年までの十三年間に幕府の出した海外渡航の許可狀は百七十九通に達してゐるし、その後一六三五年の海外渡航禁止に至るまでの海外渡航船は百四十八隻以上であつたといはれてゐる。その行先は、臺灣からマラッカに至るまでの諸地方、ブルネイやモルッカの諸島などである。船は、大きい場合には三百名以上を乘せ、その大部分は商人であつた。船主も、島津家久、松浦鎭信、有馬晴信、加藤淸正、細川忠興などの大名や、末次平藏、長谷川權六などの幕府官吏を混へてはゐるが、大部分は商人であつた。角倉了以、同興一、末吉孫左衞門、荒木宗太郎、西宗眞、船本彌七郎、などが有名である。さうしてこれらの人たちは、外に向つて相當に活潑な働きを見せてゐたのである。

右の內で一六〇八年にチャムパ（占城）へ行つた有馬晴信の船は、歸途マカオに滯留して事件を起した。船員が亂暴してポルトガル兵に銃殺されたのである。翌年マカオの司令官ペッソアは、マードレ・デ・デウスといふ大船に多量の荷を積んで長崎に來た。この船は縱四十八間、橫十八間、吃水線上の高さ九間、檣四十八間であつた。ペッソアは有馬晴信の船の事件を云ひ立てて、日本人のマカオ渡航禁止を家康に乞ひ、その許可を得た。他方有馬晴信も船員が侮辱を受けたことを云ひ立てて、その雪辱の許可を家康に請願した。家康は、事實を調査して適當に處分せよと晴信に命じた。そこで晴信は、長崎奉行と相談してペッソアを召喚したが、ペッソアはそれに應ぜず、大急ぎで出帆の準備に取り掛つた。止むを得

ず晴信は實力に訴へることにして、一六一〇年一月六日にマードレ・デ・デウス號を攻撃し始めた。ペッソアは錨索を切つて逃げ出さうとしたのであつたが、風がなくて動けず、三日間攻撃を受け續けた。さうして四日目に漸く微風が出たので福田のあたりまで逃げた。このまゝ逃げられゝば晴信の面目は丸潰れである。長崎奉行は晴信の攻撃が手ぬるいと非難し、晴信はそれを口惜しがつて、「奉行を斬り長崎を燒いて自殺する」と云つたほどであつた。幸ひまた風が落ちて、船が動かなくなつた。有馬の船隊は船にやぐらを作りその前面に生皮を張つて銃撃のなかを突進して行つた。この肉迫戰の間に防禦側の投げた燒彈で火が帆布に移り盛んに燃え出した。ペッソアは火藥庫に火をつけろと命じて海へ飛び込んだ。火藥の爆發と共に船はひつくり返つて沈み、ペッソア以下は死んだ。これでやうやく晴信はその面目を保つたのである。

この事件は勿論面倒な外交問題を引き起したが、またキリシタン大名有馬晴信の沒落の因ともなつた。長崎奉行の配下であつた岡本大八が、右の燒打事件の恩賞を周旋すると稱して、晴信から再三賄賂を取つたのである。それが露見して捕へられると、今度は大八が晴信の逆心を訴へた。長崎奉行を斬り長崎を燒くといつた晴信の興奮した言葉を云ひ立てたのである。結局大八は火刑、晴信は流罪次いで切腹となつたが、その處刑は一六一三年の禁教令の直前で、大八、晴信、いづれもキリシタンであつた。外に向ふ衝動が巧みに鎖國的傾向に利用せられた一例といつてよい。

同じ有馬晴信は、一六〇九年に家康の内命を受けて臺灣に探檢隊を送つてゐる。これは成功しなかつたので、一六一六年に長崎の代官村山等安が幕府の許可狀を得て十三隻の遠征艦隊を臺灣に送つたが、これもまた暴風に逢つて失敗した。日本の貿易船が、新しく臺灣へ進出したオランダ人と衝突しはじめたのは、一六二五年頃からである。長崎代官末次平藏の船の船長濱田彌兵衛が臺灣で活躍したのはこの時であつた。生絲貿易上のいざこざがだん〳〵こじれて、一六二八年に彌兵衛が二隻を率ゐて臺灣に行つたときには、船に小銃など相當の武器が積込んであつたし、乘組員も四百七十人であつた。萬一の場合には武力行使を覺悟してゐたのである。それに對してオランダの臺灣長官ノイツは初めから高壓的に出て、武器を取り上げたりなどした。だから彌兵衛は、ノイツの不意を衝いて捕虜にし、それを枷に使つて生絲貿易の懸案を解決する、といふやうな離れ業をやつた。しかもそれは出先での挿話的な出來事ではなく、やがて平戸で

のオランダ船の抑留、オランダ商館の閉鎖にまで發展して行つた。オランダのバタビヤ總督は翌一六二九年に特派使節を寄越して事件の解決に努力したが、幕府は臺灣におけるオランダの根據地ゼーランヂヤ城の引き渡し或は破壞を要求し、それを拒絶すればオランダ貿易を禁止するやうな氣勢を見せた。オランダ人は勿論この要求には應じなかつたが、しかし、日本貿易を失ふことをも怖れ、遂に濱田彌兵衛と事を起した前臺灣長官ノイツを犧性にすることにして、一六三二年にノイツを日本に連れて來て日本側に引き渡した。その頃には彌兵衛の船の船主であつた初代末次平藏も既に死んでゐたし、鎖國の形勢が急激に熟しつゝあつたために、幕府は事件責任者の引き渡しを以て滿足し、船の抑留や商館の閉鎖を解いてオランダ貿易を舊に復したのである。

その後オランダ人はいろ〳〵と幕府の御機嫌を取つたので、ノイツは一六三六年に釋放された。また翌一六三七年には、オランダ人側から、日本とオランダとが同盟してポルトガルの根據地マカオ、スペインの根據地マニラ及び基隆を攻略しようといふ案を持ち出した。やがて長崎代官の二代目末次平藏は、商館長コークバッカーに宛てて、幕府はキリスト教宣教師の根據地フィリッピンを征服するに決した、ついては軍隊の渡航や上陸を掩護し、スペイン艦隊を撃退する、といふ任務に必要なオランダ艦隊を派遣して貰ひたい、と申込んで來たといふ。オランダ商館は大艦四隻、ヨット二隻の派遣を決議し、バタビヤ總督もこのことを本國の十七人會に報告したといふのであるから、架空のことではないであらう。

このフィリッピン遠征は島原の亂のために何處かへふつ飛んでしまつたが、一六三七年になほ氣運が動いてゐたのであるから、外に向ふ衝動はなほかなり強かつたといはなくてはならない。だからこの頃に南洋の日本町が相當に榮えてゐたといふことは、不思議ではないのである。

シャムの日本人町は、首府アユチヤの南郊にあつた。メーナム河を挾んでポルトガル人町やシナ人町と對し、オランダ商館とも近かつた。この町は、一六一〇年代には既に出來てゐたらしい。町の最初の頭領は純廣、二代目が城井久右衛門、三代目が山田長政である。長政は沼津の城主大久保忠佐の駕籠舁であつたが、何時の間にかシャムに渡り、一六二一年にはシャム四等官、一六二八年には一等官に昇進してゐる。シャムの内亂に關與し、かなり大きい勢力を持つてゐたが、一六三〇年に毒殺された。そのあと日本人町は燒き拂はれたが、やがて復興して二人の頭領を置くことになつた。

カンボヂヤの日本人町は、今のプノンペンに近い當時の首府ウドンにあつた。やはりポルトガル人町やシナ人町と相隣つて居り、オランダ商館とも近かつたが、一六三七年の見聞記によると、日本人は七八十家族で、皆追放人であつた。オランダ人たちを支配してゐる港務長官の一人も日本人であつた。この日本人たちは一六二三年にシャム軍が侵入したとき國王を援けて敵を擊退し、一六三二年にシャムの壓迫が加はつたときには七隻のジャンクでメーナム河口へ封鎖に行つた。一六三六年の内亂に際しても國王を助け、王から非常に尊敬されてゐた。ここへ日本船が來たのは一六三六年が最後である。

交趾の日本人町は、廣南の外港ツーランと、その南方八九里のフェーホとにあつた。フェーホでは一六一八年に船本彌七郎が初代の頭領になつた。

マニラの日本人町は、すでに十六世紀の末に千人の人口を有して居り、一六二〇年頃には三千人に達した。一六一四年の大追放で高山右近、内藤如安、その妹ジュリヤなど大勢來たが、右近は間もなく死に、如安たちはヤソ會の關係で日本人町にはゐなかつた。一六二四年頃からは日本とスペインとの關係が悪化し、一六三七年には八百人に減じてゐたといふ。

右のような日本人町のないところにも日本人は進出してゐた。香港の西のマカオはポルトガル人の根據地であつた關係から、一六一四年の追放者百餘人、一六三六年の追放者二百八十七人などが行つてゐるが、日本から奴隸としてそこから連れて行かれたものも少なくなかつたらしい。そこからずつと西へ行つてトンキンにもかなりの日本人がゐたらしい。一六三六年にはオランダのカピタンが日本人の家に泊めて貰つたり、長崎人和田理左衞門や日本婦人ウルサンの斡旋によつて、國王に謁見したりしてゐる。更にマレー半島南端のマラッカでは、一六〇六年のオランダ艦隊の攻擊のときに、日本人が守備隊に加はつて勇敢に防禦に努めたといはれてゐる。ジャバのバダビヤへは、一六一三年にオランダ人が大工・鍛冶・左官・水夫・兵士など六十八人を雇つて行つた。その後も日本の移民を幾度か連れて行つたらしい。一六二一年には幕府がそれを禁じたほどである。東インド會社の使用人としてはその頃七十人とか五十人とかの日本人がゐたし、自由市民としても百幾十人の男女がゐた。モルッカ諸島にも、一六二〇年には二十人、一六二三年にはアムボイナ島に六十三人の日本人がゐたといはれる。なほその他南洋諸島やインドにも少しづつは行つてゐた。

しかし以上のように外に出て行つた日本人に對して、日本の國家はほとんど後援をしなかつたのみならず、逆

にその抑壓に努めて、遂に一六三六年に、全然本國との交通を絶つてしまつた。從つて、この後の日本人町や海外在留者は、たゞ衰退し消滅して行くばかりであつた。だから、當時の日本人に外に向ふ衝動がなかつたのではない、爲政者が、國内的な理由によつてこの衝動を押し殺したのである、とはつきり斷言することが出來るのである。

つまり日本に缺けてゐたのは航海者ヘンリ王子であつた。或はヘンリ王子の精神であつた。

恐らくたゞそれだけである。そのほかにさほど多くのものが缺けてゐたのではない。

慶長より元禄にいたる一世紀、即ちわが國の十七世紀は、文化のあらゆる方面において創造的な活力を示してゐる。その活力は決して弱いものではなく、もし當時のヨーロッパ文化を視圏内に持つて仕事をしたのであつたならば、今なほわれ〳〵を壓倒するやうな文化を殘したであらうと思はれるほどである。學者として中江藤樹、熊澤蕃山、伊藤仁齋、文藝家として西鶴、芭蕉、近松、畫家として光琳、師宣、舞臺藝術家として竹本義太夫、初代團十郎、數學者として關孝和などの名を擧げただけでも、その壯觀は察することが出來る。

文化的活力は缺けてゐたのではない。たゞ無限探求の精神、視界擴大の精神だけが、まだ目ざめなかつたのである。或はそれが目ざめかゝつた途端に暗殺されたのである。精神的な意味における冒險心がこゝで萎縮した。キリスト教を恐れて遂に國を閉ぢるに至つたのはこの冒險心の缺如、精神的な怯懦の故である。當時の日本人がどれほどキリスト教化しようと、日本がメキシコやペルーと同じやうに征服されるなどといふことは決してあり得なかつた。キリスト教化を征服の手段にするといふのは、それによつて國内を分裂させ、その隙に乘ずるといふ意味であるが、日本國内の分裂はキリスト教を待つまでもなくすでに極端に達してゐたのであつて、隙間はポルトガル人の前に開けひろげであつたのである。征服が可能であれば、それを手控へるやうなポルトガル人ではなかつたであらう。勿論、キリスト教化が進めば、秀吉や家康のやうな考を以て國内を統一することは不可能になつたかも知れない。しかしどこかのキリシタン大名が國内統一に成功した場合でも、キリシタンであるが故に日本の主權を放棄してスペイン國王に服屬したであらうなどとは到底考へられないのである。スペイン國王への書簡にそれに類する文句があつたからと云つて、それを證據にするわけには行かない。書簡の作法では、君主と

して仰いでゐるわけでもない相手に對して誰もが平氣で「君」と呼び、おのれを忠實な僕といふ。それと政治的な關係とは別である。日本人はヨーロッパ文明にひかれてキリスト教を攝取したのであつて、そこに當時の日本人の示したたゞ一つの視界擴大の動きがあつた。その後のキリシタン迫害は、キリシタンとなつた日本人の狂熱的な側面をのみ露出せしめることになつたが、しかしそれがすべてではなかつた。狂熱的傾向は當時のヨーロッパにおいても顯著であつたし、わが國の一向一揆などもそれを明瞭に示してゐるが、しかしこの時代的特性のなかに根强く芽をふき出した合理的思考の要求こそ、近世の大きい運動を指導した根本の力である。わが國における傳統破壞の氣魄は、ヨーロッパの自由思想家のそれに匹敵するものであつた。だからたとひ日本人の大半がキリスト教化するといふ如き情勢が實現されたとしても、教會によつて焚殺されたブルーノの思想や、宗教裁判にかけられたガリレイの學說を、喜んで迎へ入れる日本人の數は、ヨーロッパにおいてよりも多かつたであらう。さうなれば、林羅山のやうな固陋な學者の思想が時代の指導精神として用ゐられる代りに、少なくともフランシス・ベーコンやグローティウスのやうな人々の思想を眼中に置いた學者の思想が、日本人の新しい創造を導いて行つたであらう。日本人はそれに堪へ得る能力を持つてゐたのである。

ヤソ會の宣教師は、日本における佛教諸派の間の對立抗爭が、キリスト教に對する佛教の防禦力を弱めてゐることを指摘した。が、そのことはやがて日本におけるキリスト教の傳道そのものの運命ともなつたのであつて、秀吉の宣教師追放の頃からの舊教諸派の間の對立抗爭は著しいものであつた。そこへ間もなく新教を奉ずるオランダ人や、ローマ教會を離脫したイギリス人たちが現はれてくる。キリスト教を無制限に攝取しても、それがただ一つの運動に統一され、日本侵略の手段に用ゐられるなどといふことは、到底起り得なかつたのである。この事情は少しく冷靜に觀察しさへすれば直ぐに解ることであつた。それを爲し得なかつたのもまた爲政者の精神的怯懦の故である。

たゞこの一つの缺點の故に、ベーコンやデカルト以後の二百五十年の間、或はイギリスのピューリタンが新大陸へ渡つて小さい植民地を經營し始めてからあの廣い大陸を西へ西へと開拓して行つて遂に太平洋岸に到達するまでの間、日本人は近世の動きから遮斷されてゐたのである。このことの影響は國民の性格や文化の隅々にまで及んでゐる。それにはよい面もあり惡い面もあつて單純

に片附けることは出來ないのであるが、しかし惡い面は開國後の八十年を以てしては容易に超克することは出來なかつたし、よい面といへども長期の孤立に基く著しい特殊性の故に、新しい時代における創造的な活力を失ひ去つたかのように見える。現在のわれ〳〵はその決算表をつきつけられてゐるのである。

ロヨラ，イグナチウス・ Ignatius Loyola 60,189,199,201
ロヨラ，ジョルジ・ Jorge Loyola（日本人イルマン） 373,375ff.
ローラン Roland 12
ロルダン，フランシスコ・ Francisco Roldan 77
ロレンソ Lorenzo（フランシスコ・ダルメイダの子） 47ff.,50
ロレンソ Lourenço（日本人イルマン） 200,210,215ff.,218,
227,232ff.,236ff.,267,271,277,280ff.,284,286ff.,
296,300—7,310,312,315ff.,320,326,332—4,337ff.,
348ff,.351,354ff.,358,365,379,381,383,386,391

ワ　行

ワイナ・カパク Huayna Capac 125ff.
ワスカル Huasacr 125ff.,135ff.,139
ワトリング島 Watling I. 72
ワマチュコ Huamachuco 138
ワリニャーニ，アレッサンドロ・ Alessandro Valignani 331,348,350—9
370—8,391ff.,395,397
ワルドゼーミューラー，マルチン・ Martin Waldseemüller 80
ワルフィシ灣 Walfisch, Walvis B. 37

ミシシッピー　Mississippi　84
ミラノ　Milano　14,16
ミンダナオ　Mindanao　149,153,155

ムスタファ　Mustafa　57
ムッセメルリ　Mussemelly　31

メオサン，ジュスチノ・Justino Meosão（京都の信者）　323ff.
メキシコ（メシコ）　Mexico　86,89—102,140,154,161,394,400,402,413
メヂナ　Medina　7
メーナム河　R. Menam　411
メネゼス，エンリケ・デ・　Enrique de Menezes　57
メネゼス，ドゥアルテ・デ・　Duarte de Menezes　57
メランヒトン　Melanchthon　160
メルヴ　Merv　6
メンダニャ，アルバロ・デ・　Alvaro de Mendaña　158
メンドーサ　Mendoça　69
メンドーサ，アントニオ・デ・　Antonio de Mendoça　155
メンドサ，マヌエル・デ・Manuel de Mendoça　240,246ff.

モザンビク　Mozambique　39ff.,47
モッセル灣　Mossel B.　38
モニカ　Monica（日本娘）　266
モハメッド　Mohammed, Muhammad, Mahomet　3
モラーレス，ガスペル・Gasper Morales　84,102
モーリッツ（オレンヂ公）Maurits, Graf van Nassau, Prins van Oranje　399ff.
モリナ，アロンソ・デ・Alonso de Molina　110
モルッカ　Moluccas　54,59,145,149,151,153,156,159,409,412
モンテ・クリスチ　Monte Cristi　75
モンテスーマ　Montezuma　92ff.,94
モンテビデオ　Montevideo　147
モンバサ　Mombasa　40
モンロヴィア　Monrovia　36

ヤ　行

ヤジロー（アンジロー）Yajiro (Anjiro)　174,187—93,195ff.,199—202,203,267
ヤルカンド　Jarkand, Yarkand　28

ユカイ　Yucay　114
ユカタン　Yucatan　79,86ff.

ラ　行

ラプラタ　La Plata　144
ラヤッツォ　Lajazzo　28
ラ・ラビダ　La Rabida　70

リオ・デ・オウロ　Rio de Oro　34
リオ・デ・ヂャネイロ　Rio de Janeiro　147
リオナルド・ダ・ヴィンチ　Lionardo (Leonardo) da Vinci　18
リーフデ（船名）　Liefde（前名 Erasmus）　398ff.
リマ　Lima　248,140
リマサガ（マサゴア）　Limasagua (Macagua)　149
リユベック　Lübeck　15

ルイス，ドン・　Dom Luis（新助）　252ff.,257ff.
ルイス，バルトロメー・Bartolome Ruis　105—8
ルケ，エルナンド・デ・Hernando de Luque　103ff.,107
ルシア　Lucia（三箇領主夫人）　352
ルソン　Luzon　157,392
ルター　Luther　160
ルブルク　Rubruk　27

レアン　Leão　（清水）323ff.（野津領主）368
レアン，ドン・　Dom Leão（日本人）　291ff.
レイテ　Leyte　149
レオン　Leon（ニカラグッの町）　86
レオン，キエサ・デ・　Cieza de Leon　115
レオン，フアン・ポンスェ・デ・　Juan Ponce de Leon　74
レガスピ，ミゲル・ロペス・デ・Miguel Lopez de Legaspi　157
レティクス　Rheticus　160
レーテス　Jñigo Ortiz de Retes　156—8
レーペ，ディエゴ・デ・Diego de Lepe　78

ロアイサ，ガルチア・ホフレ・デ・Garcia Jofre de Loaysa　153
ロドリゲス　Francisco Rodriguez　395,397
ロビンソン・クルーソー　Robinson Crusoe　158
ロマン，ペロ・　Pero Romão　371

ヘートン　Hayton　27
ヘリアント　Heliand, Heiland　8
ヘンリ（エンリケ）航海者　Henry the Navigator (Dom Enrique el Navegador)　31, 69, 74, 80, 160, 165, 171, 175, 413
ベオヴルフ　Beowulf　8
ベーコン，フランシス・　Francis Bacon　405, 414
ベーコン，ローヂァ・　Roger Bacon　18
ベナルカザル　Benalcazar　84
ベネズェラ　Venezuela　78, 81
ベハイム，マルチン・　Martin Beheim　37
ベラ，ブラスコ・ヌンニェス・　Blasco Nuñez Vela　141
ベラ・クルス　Vera Cruz　87, 89, 93ff., 97
ベラグワ　Veragua（パナマ地峡）　81
ベラスケス，ディエゴ・　Diego Velasquez　74, 87, 88, 93, 97
ベルショール　Belchior　210, 215ff., 218, 243, 246ff., 252, 264, 287, 296, 348
ベント　Bento（京都の信者）　323
ペグ　Pegu　54
ペッソア　Andrea Pessoa　409ff.
ペドラリアス・デ・アビラ　Pedrarias de Avila　84, 103ff.
ペルー　Peru　86, 102ff., 155, 158, 394, 402, 413
ペレイラ　Pereira　240
ペレイラ，ディエゴ・　Diego Pereira　204
ペレイラ，ドン・ジョアン・　Dom João Pereira　281ff.
ペロ・デ・コヴィリャム　Pero de Covilham　38

ホチミルコ　Xochimilco　99
ホンデュラス　Honduras　79, 81, 90, 92, 101
ボゴタ　Bogota　84
ボテリヨ，ローレンソ・　Lourenço Botelho　189
ボハドル　Bojador　32ff., 175
ボハラ（ボカラ）　Bochara, Bokhara　6, 28
ボバディリヤ，フランシスコ・デ・　Francisco de Bobadilla　77
ボホル　Bohol　150, 157
ボムベイ　Bombay　57
ボリビア　Bolivia　141, 143
ボルヂア，チェーザレ・　Cesare Borgia　17
ボルネオ　Borneo　30
ボロニャ　Bologna　160
ポトシ　Potosi　141

ポポカテペトル　Popocatepetl　89
ポーロ，マルコ・　Marco Polo　17, 28ff., 33, 68

マ　行

マカオ　Macao　407—9, 412
マガリャンス（マジェラン），フェルナン・デ・　Fernão de Magalhães (Magallanes, Magellan)　52, 60, 84, 144—52, 154
マキアヴエリ　Machiavelli　16
マーシャル諸島　Marshall Is.　149, 154, 159
マスカレニャス，ペロ・　Pero Mascarenhas　57
マセンシヤ　Maxenxia（小早川秀秋夫人）　383
マダガスカル　Madagascar　29, 38, 48
マドラス　Madras　30
マードレ・デ・デウス　Madre de Deus　409
マニラ　Manila　158ff., 397, 399, 401ff., 406, 412
マノエル一世　Manoel I.　38, 46, 50, 53, 55, 78
ママ・オェロ・ワコ　Mama Oello Huaco　111
マームード　Mahmud　53
マヤ　Maya　87, 101
マラバル　Malabar　40
マラッカ　Malacca　47, 52ff., 59ff., 82, 144ff., 152, 154, 173ff., 188, 204, 208, 214ff., 221, 392, 409, 412
マリア　Maria（野津領主夫人）368（ガラシヤ夫人待女）390
マリアナ諸島　Mariana (Ladrona) Is.　149, 153ff., 159
マリンディ　Malindi, Melinde　40
マルキーズ諸島　Marquesas Is.　149
マルケナ，フアン・ペレス・デ・　Juan Perez de Marchena　70
マルチネス　Pedro Martinez　393ff., 397
マルチノ　Martino（原）　373
マルティン　Martin　148, 150
マルティンス　Fernão Martins　66
マルディヴ（マルヂバ）　Maldive　47
マンコ・カパク　Manco Capac　（インカ始祖）111ff., 112
（ワスカルの弟）127
マンショ　Mancio　（三箇城主の子）335ff.
（伊東祐益）366, 373
マンジ　Manzi　29, 67

ミカエル（ミゲル）　Michael (Miguel)（千々石清左衞門）　373

パタゴニア　Patagonia　149
パタニ　Patani　174
パドゥア　Padua　160
パナマ　Panama　81ff.,85,103,127ff.,142—4
パラワン　Palawan　150
パリア　Paria　78
パレルモ　Palermo　6,15
パレンバン　Palembang　29
パロス　Palos　70,72

ヒッポ　Hippo　5
ビセンテ　Vicente（日本人イルマン）　378,380
ビスナガ　Bisnaga　53
ビデャプール　Bidjapur, Bidschapur　51
ビリャロボス，ルイ・ロペス・デ・　Ruy Lopes de Villalobos　155
ビルー　Biru　103
ビルマ　Burma　29ff.
ビレラ，ガスパル・　Gaspar Vilela　209,214ff.,221—40,261,265—7,272,274—7,287—9,315,323,327
ビントゥン　Binh Thuan　62
ピガフェッタ，アントニオ・　Antonio Pigafetta　147,149—51
ピサ　Pisa　14
ピサロ，エルナンド・　Hernando Pizarro　130ff.,140
ピサロ，ゴンサロ・　Gonzalo Pizarro　140,141—3
ピサロ，フランシスコ・Francisco Pizarro　81,83ff.,102—11,155
ピノス　Pinos　75
ピレイラ　Pireira　ペレイラを見よ
ピンソン，ビセンテ・ヤンネス・　Vicente Yañez Pinzon　78,144
ピントー　Fernão Mendes Pinto　62

ファラビ　Farabi, Alfarabi　7ff.
ファリヤ，ジョルジ・デ・　Jorge de Faria　205
ファレイロ，ルイ・　Ruy Faleiro　146
ファロエ諸島　Faroe Is.　65
フィゲイレド，ベルショール・デ・　Belchior de Figueiredo　261ff.281,284,288
フィリッピン　Philippine　149,154ff.,159—61,392,394,411
フィレンツェ　Firenze　14,30,67
フェゴ　Fuego　158

フェーホ　Faifo　坡舶　412
フェリパ　Felipa（キタ夫人）　326
フェリピナス（フィリッピン）Felipinas (Philippine)　155
フェリペ二世　Felipe II.　156
フェルディナンド王（フェルナンド五世）Ferdinand, Fernando V.　46,85
フェルナンデス，ジョアン・　João Fernandes　191ff.,196—9,201,207,208—10,216—20,222ff.,226ff.,237,242,246,248,251ff.,258,261ff.,280,283,288
フェルナンデス，フアン・　Juan Fernandez　158
フェルナンド，ドン・　Dom Fernando Cavallero　188
フランク族　Eranke　3,5
フランシスコ，ジョアン・　João Francisco　330,333,340,343
フランシスコ，ドン・　Dom Francisco　（澤城主）271ff.（大友宗麟）366
フロイス，ルイス・　Luis Frais　205,214ff.,236ff.,239,246,256ff.,260—78,280,282ff.,295—312,314—25,328—30,333,337,339,341,344,353ff.,356,358,363ff.366—8,378,380,384—8,395
フロレス　Luis Flores　402
ブリストル　Bristol　65
ブリトー，アントニオ・デ・　Antonio de Brito　60
ブル　Buru　151
ブルグンド族　Burgunder　3
ブルゴーニュ　Bourgogne　3
ブルージュ　Bruges　15
ブルネイ　Brunei　150,409
ブルーノ　Giordano Bruno　414
ブルーワー，ヘンドリック・　Hendrik Brouwer　400
プェルト・サン・フリアーン（ポート・セント・ジュリアン）Puerto San Julian (Port S. Julian)　147
プェルト・ビエホ　Puerto Viejo　128
プトレマイオス　Ptolemaios Klaudios　33
プナ　Puna　128
プノンペン　Pnom-Penh　412
プラトーン　Platon　6
プリニウス　Plinius　66
プレスコット　William Hickling Prescott　109,123
プレスビテル・ヨハンネス（プレスター・ジョン）　Presbyter Johannes (Prester John)　27,36ff.
プロヴァンス　Provence　12
プロタシヨ　Protasio（有馬晴信）　374

トッレ，ベルナルド・デ・ラ・ Bernardo do la Torre 155,157
トトマーク Totomac 93
トパルカ Toparca 138
トマス・アクィナス Thomas Aquinas 8,12,21,202
トマス，ドン・ Dom Thomas（内藤土佐） 320
トメバンバ Tomebamba 126
トルキスタン Turkistan, Turkestan 7
トルテーク Toltek 89ff.,101
トルレス，コスメ・デ・ Cosme de Torres 175,191,196,199,201ff.206,
209ff.,215ff.,221—7,233,240—3,246,248—53,255—
8,261—4,276,280—3,285—93,295,310,348,359
トルレス，ジョアン・デ・ João de Torres（日本人） 226
トルレス，ルイス・バエス・デ・ Luis Vaes de Torres 159
トレド Toledo 127
トンキン Tongking 412

ナ 行

ナバルレ Navarre 10
ナポリ Napoli 14ff.

ニカラグヮ Nicaragua 85,92,140
ニクエサ，ディエゴ・デ・ Diego de Nicuesa 81ff.
ニコバル Nicobar 29
ニコロ・デ・コンティ Nicolo de' Conti 30
ニシャプール Nischapur 6
ニヂェル Niger 36
ニューギニア New Guinea 154ff.,158
ニューブリテン New Britain 156
ニューヘブライヅ New Hebrides 159
ニュールンベルク Nürnberg 15,160

ヌネス（ヌニェス），ベルショール・ Belchior Nuñes 214ff.,218,
221ff.,227,265
ヌネズ Nunez 34

ノイツ Pieter Nuijts 410
ノローニャ，ガルチア・デ・ Garcia de Noronha 58ff.
ノンブレ・デ・ディオス Nombre de Dios 82,142

ハ 行

ハイチ Haiti 72ff.,76,78,81,97,99
ハイルスベルク Heilsberg 160
ハウハ Xauxa, Jauja 136,138,143
ハルマヘラ Halmahera 152—4,156
ハレブ Haleb 6
ハロ，クリストヴァル・デ・ Christoval de Haro 145
バウティスタ，ジョアン・ João Bautista 257,282,288
バクダード Bagdad, Baghdad 6ff.,28
バス，アルバロ・ Albaro Vaz 188—90
バス，ゴンサロ・ Gonçalo Vaz 258,282,288
バス，ヂヨゴ・ Diego Vaz 205
バスコ・ダ・ガマ Vasco da Gama 38ff.,44ff.,57,60,78,79ff.,
195,201
バスティダス，ロドリゴ・デ・ Rodrigo de Bastidas 81
バスラ Basra 6,28
バタビヤ Batavia 411ff.
バダホス Badajoz 153
バッセイン Bassein 58ff.
バハドゥル Bahadur 57
バブ・エル・マンデブ Bab el Mandeb 57
バプチスタ，ペドロ・ Pedro Baptista 392
バラレッジョ，アレッサンドロ・ Alessandro Vallareggio 288
バリャドリード Valladolid 80,145
バルク Balkh 6,28
バルセロナ Barcelona 14,73
バルベルデ Vicente de Valverde 133
バルボア，バスコ・ヌニェズ・ Vasco Nuñez Balboa 81ff.,99,102,144
バルボサ，ディオゴ・ Diogo Barbosa 145
バルボサ，ドゥアルテ・ Duarte Barbosa 147,150
バンコック Bangkok 30
パウモツ諸島 Paumotu Is. 149,153
パウラ Paula（日本少女） 311
パウロ Paulo（日本人信者）217,219（日本イルマン）253,
282,289,359,372,379（文太夫）352,357
パエス Paez 398
パシヨ Francisco Passio 383
パジェス，レオン・ Léon Pagés 395

ソテロ，ルイス・　Luis Sotelo　400
ソデリニ　Soderini　80
ソト，フェルナンド(エルナンド)・デ・　Fernando (Hernando) de Soto　84,128,130,137ff.
ソファラ　Sofala　38,39
ソリス，フアン・ディアス・デ・　Juan Dias de Solis　144,147
ソロモン諸島　Solomon Is.　158ff.

タ　行

タイラー，ワット・　Wat Tyler　175
タカメス　Tacamez　106
タバスコ　Tabasco　87ff.
タラウト　Talaut　153
タンピコ　Tampico　88
ダイー(アイー)，ピエール・　Pierre d'Ailly (Petrus de Alliaco)　65ff.
ダヴァネ　Davané　40
ダギアル，ホルヘ・　Jorge d'Aguiar　50
ダブール　Dabul　50
ダマスクス　Damascus　4,6
ダミヤン　Damião（日本人イルマン）　227,248,251,253,264,275,289,348,366,391
ダリエン　Darien　81,83,85ff.,127
ダリヨ　Dario（高山圖書頭　飛彈守）　295,299,316ff.,320ff.,324ff.,336ff.,342ff.,356
ダルカセヴァ，ペドロ・　Pedro d'Alcaceva　208—10
ダルブケルケ　d'Albuquerque　アルブケルケを見よ
ダルメイダ　d'Almeida　アルメイダを見よ
ダンテ　Dante　13

チェーザレ・ボルヂア　Cesare Borgia　17
チチカカ　Titicaca　111,120,143
チチメーク　Chichimek　90
チパング　Cippangu　ジパングを見よ
チモル　Timor　151
チャウル　Tschaul　48,58
チャルクチマ　Challcuchima　136,138
チャンパ　Champa　占城　占婆　29ff.,409
チョルラ　Cholula　136
チリー　Chile　119,125,139,143,158
チンギスカン　Chingis Khan　成吉思汗　21

ヂウ　Diu　48,57ff.
ヂェノヴァ，ヂェノア　Genova, Genoa　14ff.,29
ヂッダ　Jidda, Dschidda　56
ヂョゴ　Diogo（日本人）　227—9

ツーラン　Tourane 茶麟　412
ヅアルテ・ダ・ガマ　Duarte da Gama　201,221

ティドール　Tidor　59,151ff.
ティントー河　R. Tinto　69
テオティワカン　Teotihuacan　98
テオドーシウス　Theodocius　5
テオドリック　Theodoric　3
テツクコ　Tezcuco, Tetzcoco　90,99ff.
テノチティトラン　Tenochtitlan　90
テペアカ　Tepeaca　99
テュニス　Tunis　36
テルナーテ　Ternate　59,151ff.
テワンテペク　Tehuantepec　101,153
ディアス，ディニズ・　Diniz Dias　34
ディアス・デル・カスティョ，ベルナール・　Bernal Diaz del Castillo　84,95
ディアス，バルトロメウ・　Bartolomeu Dias　37ff.,74
デカルト　Descartes　415
デカン　Deccan　30,58
デスピノーザ，ゴンサロ・バス・　Gonzalo Vas d'Espinoza　150—2
デフォー，ダニエル・　Daniel Defoe　158
デリー　Delhi　58

トゥパク・インカ・ユパンキ　Tupac Inca Yupanqui　125
トゥマコ　Tumaco　（酋長）83（灣）106
トゥラ　Tula　89
トゥラスカラ　Tlazcala　92ff.
トゥリスタン　Nuño Tristão　34
トゥリニダッド　Trinidad　77
トゥルーバドゥル　Troubadour　12
トゥンベス　Tumbez　105,108ff.,127ff.,142
トスカネリ，パオロ・　Paolo Toscanelli　18,30,36
トッレ，フェルナンド・デ・ラ・　Fernando de la Torre.　154

サンチェズ，アイレス・Ayres Sanchez　258,287
サンチャゴ　Santiago　（キュバの）88（河）140
（チリーの）158（カリフォルニアの）159
サン・チャゴ島　Sao Thiago　151
サンチョ　Sancho（三箇城主）　277ff.
サンヂル島　Sangir I.　153
サントアンヂェル，ルイース・デ・　Luis de Sant-Angel　70
サント・ドミンゴ・　Santo Domingo.　77ff.,81
サン・フアン河　San Juan, R.　104ff.,125
サン・フェリペ　San Felipe（船）　393ff.
サン・マテオ灣　San Mateo, G.　105,128
サン・ミゲル　San Miguel（ペルー最初の植民地）　129,136
サン・ミゲル灣　San Miguel, G.　83
サン・ラザロ諸島　San Lazaro Is.　149
ザイトン　Zayton 刺洞　泉州　28ff.,67,72
ザンジバル　Zanzibar　29
ザンベジ　Zambezi　40

シェラ・レオネ　Sierra Leone　34ff.
シマン，ドン・　Dom Simão（田原親虎）　361ff.,364,367,369
シメアン（シマン）　Simeão (Simão)（池田丹後）　326,335ff.,357
シャビエル，フランシスコ・デ・　Francisco de Xavier 61ff.,143,161,174,182,187,188—209,214,219,222ff.,246,269, 288,330,348,366ff.,378,391
シャム　Siam　29,54,174,406,412
シルヴァ（シルバ），ドワルテ・ダ・　Duarte de Sylva　208—10,212,215ff.217,222,242,260
シルバ，ペドロ・ダ・　Pedro da Silva　191,195
シルベイラ，ドン・ゴンサロ・ダ・　Dom Gonçalo da Silveira　407
ジパング（チパング，チッパング）　Zipangu, Cippangu 日本國　28ff.,68,74ff.
ジャッケリ　Jacquerie　175
ジャバ　Java　29ff.,47,412
ジャマイカ　Jamaica　75,79
ジュスト・ウコン　Dom Justo Ucon（高山右近友祥）　317,324ff.,341—3,353,356ff.,380ff.,384,388ff.,401,412
ジュリア　Julia　（大友宗麟新夫人）365,367
（内藤如安妹）401,412
ジュリアン，ドン・　Dom Julian　（内藤玄蕃）320（中浦）373
ジョアン　João　（日本人イルマン）253,362ff.,365,367

（岸山城主）325,357（内藤如安）316—8,320ff.,401,412
ジョアン一世　João I.　31
ジョアン二世　João II.　37ff.,69,72
ジョアン三世　João III.　57,59,61
ジョアン，ドン・　Dom João（一部）　283
ジョヴァンニ，マリニョリの　Giovanni Marignolli　30
ジョルジ　Jorge（結城彌平治）　325,357
ジョン（ジョヴァンニ），モンテコルヴィノの　John of Monte Corvino　30

スコトゥス・エリゲナ　Scotus Erigena　8,202
スーザ，マルチン・アフォンソ・デ・　Martin Affonso de Sousa　61
スピノラ　Carl Spinola　404
スペックス，ジャックス・　Jacques Specx　399
スマトラ　Sumatra　29ff.,54
スルアン　Suluan　149
スンダ　Sunda　30
ズニガ（スニガ）　Pedro de Zuniga　402ff.

セイロン　Ceylon　29ff.,47
セウタ　Ceuta　31
セケイラ，ゴンサロ・デ・　Gonzalo de Sequeira　52,151
セケイラ，ディォゴ・コペス・デ・　Diogo Lopez de Sequeira　52,57
セスペデス　Gregorio de Cespedes　358,379,383,390
セネカ　Seneca　66
セネガル　Senegal　34ff.
セバスチアン，ドン・　Dom Sebastian（大友親家）　360ff.,364
セビリャ（セビーヤ）　Sevilla　6,10,72,145ff.
セブ　Zebu, Cebu　149,157
セラノ，フアン・　Juan Serrano　84,150
セラン，フランシスコ・Francisco Serrão　59,145
セルカーク，アレキサンダー・　Alexander Selkirk　158
セルケイラ　Luis de Cerqueira　395—8,400
セルヂュック　Seljuk, Seldschuk　11
セレベス　Celebes　155
センテノ　Centeno　143
セント・ヘレナ灣　St. Helena B.　37
ゼーランヂャ　Zeelandia　411

ソコトラ　Sokotra　29,48ff.,55

キロア（キルワ）　Kiloa, Kilwa　40,47
キンザイ（キンサイ）　Quinsai, Kinsay, Khinzai（行在）　28,30,67,72
キンタ　Quinta（大友親家夫人）　365
ギネア　Guanaja, Ganaja, Ginia, Guinea　31,36ff.
ギリエルメ　Guilherme Pereira　227,242
ギルバート諸島　Gilbert Is.　149

クィビラ　Quivira（ネブラスカ地名）　84
クエリヨ　Nicolo Coelho　42
クエリヨ，ガスパル・　Gaspar Coelho　349,376,378,383,386,389,391,397
クスコ　Cuzco　111,129,135ff.,138ff.
クティニョ，フェルナン・　Fernão Coutinho　50ff.
クーニャ，ヌンニョ・ダ・　Nuño da Cunha　57ff.,61
クビライ　Khubilai, Kublai 勿必烈　21,28
クラカ　Curaca　108,113,124,128
クラカウ　Cracow　160
クローヴィス　Clovis, Chlodovech, Chlodwig　5
グヂェラート　Gudjerat, Guzerat, Gudscharat　48,50,53,57ff.
グラナダ　Granada　6,10,70（ニカラグヮの）86
グリハルバ，エルナンド・　Ernand Grijalva　155
グリハルバ，フアン・デ・　Juan de Grijalva　87ff.
グレゴリウス　Gregorius　6
グレゴリヨ　Gregorio　353
グレート・フィッシュ河　Great Fish, R.　38,151
グローティウス　Hugo Grotius　414
グッテマラ　Guatemala　92,101,140
グッナハ　Guanaja　79

ケツァルコアトゥル　Quetzalcoatl　91ff.,94ff.,96ff.
ケルン　Köln　15

コークバッカー　Nicolaes Couckebacker　411
コスタ，バルタサル・ダ・　Baltasar da Costa　261—3,280,283,288
コスモ，コスメ　Cosmo, Cosme（日本人イルマン）296,329,333 348,390（少年）311（京都の信者）323
コータン　Khotan　28
コチン　Cochin　44,57,152,264
コペルニクス，ニコラス・　Nicolas Copernicus　160
コリエンテス岬　Cabo das Corrientes　36
コルテス，フェルナンド・　Fernando Cortes　88ff.,92—103,127,140,

144,149ff.,154ff.,157
コルディレラ　Cordillera　108,112,130
コルドバ　Cordova　6,9,70
コロナド，フランシスコ・バスケス・　Francisco Vasques Coronado　84
コロンブス，クリストフォルス・　Christophorus Columbus　17,29,31, 38,64ff.,68—80,82
コロンブス，ディエゴ・　Diego Columbus　75
コロンブス，バルトロメー・　Bartolome Columbus　76ff.
コロンボ　Colombo　57
コンゴー　Congo　37
コンスタンチヌス　Constantinus　5
コンスタンチノープル　Constantinopolis　4
ゴア　Goa　51,59,161,175,189,214,269,392
ゴート族　Gote, Goths　3
ゴベヤ，ベルトラメウ・デ・　Bertlameu de Gouvea　261ff.
ゴメス，エステバン・　Esteban Gomez　148
ゴメス，ディオゴ・　Diogo Gomez　36
ゴメス，フェルナン・　Fernão Gomez　36
ゴルゴナ　Gorgona　107,127
ゴンサルベス　Jacome Gonsalvez　260,280

サ　行

サグレス　Sagres　31ff.,165
サバナス　Sabanas　83
サーペドラ，アルバロ・デ・　Alvaro de Saavedra　154,157
サマル　Samar　149,155
サマルカンド　Samarkand　6
サムパヨ，ロポ・ヴァス・デ・　Lopo Vas de Sampayo　57
サラド　Salado　31
サラマンカ　Salamanca　69,88,102,142
サルセット　Salsette　58ff.
サルミエント，ペドロ・　Pedro Sarmiento　115,158
サン・ヴィセンテ　São Vicente　31,65
サン・クリストバル　San Cristoval　158
サン・サルバドル　San Salvador　72
サン・セバスチアン　San Sebastian　81
サンタ・カタリナ　Santa Catalina　261ff.
サンタ・クルス　Santa Cruz（所）147（諸島）159（船）261ff,.280
サンタ・フェのパウロ　Paulo de Santa Fé（ヤジロー）　189
サンタ・マリア・デル・アンティガ　Santa Maria del Antigua　81,83,85

オアシャカ　Oaxsaca　102
オセス，デ・　Francisco de Hóces　153
オデリコ，ポルデノーネの・　Oderico da Pordenone　30
オトゥンバ　Otumba　98
オドアケル　Odoacer, Odwaker　3
オノル　Onor　47
オバンド，ニコラス・デ・　Nicolas de Ovando　78,88
オビエド，ゴンサロ・フェルナンデス・デ・　Gonzalo Fernandez de Oviedo　84
オフィル　Ophir　75ff.,158
オヘダ，アロンソ・デ・Alonso de Hojeda　74,76,78,80ff.
オマイヤ　Omaiya, Umaiya　4,6,9
オマーン　Oman　48
オリノコ　Orinoco　77
オルガンチノ　Organtino Gnecchi-Soldi　310ff.,312,314—6,318 325,330—4,337,340—2,344—6,347, 349ff.,352, 354—7,358,378ff., 381ff.,390ff.
オルムヅ　Ormuz　28ff.,49ff.,56ff.,59
オレリャナ　Orellana　143
オレンヂ公　Prince of Orange　モーリッツを見よ

カ　行

カイロ　Kairo, Cairo　6,30,36 53
カウーテモ（ガテモ）　Quauhtemo, Guatemo　100
カガヤン　Cagayan　150
カサス，ラス・　Las Casas　141,143
カシュガル　Kaschgar, Kashgar　28
カスティレ　Castile　10,80,107
カストロ，バカ・デ・　Vaca de Castro　141
カタイ　Cathay　67,74
カタロニア　Catalonia　10
カッスタ　Kassuta　37
カディス　Cadiz　76
カナノル　Cannanor　43ff.
カナリー群島　Canary Is.　72,75
カノ，セバスチアン・デル・　Sebastian del Cano　151
カハマルカ　Cajamarca　126,129,135
カブラル，ジョアン・　João Cabral　261—3,280,282ff.,287
カブラル，フランシスコ・　Francisco Cabral　291—4, 310,314ff. 316ff.,318,327,348ff.,359—71

カブラル，ペドラルヴァレス・　Pedro Alvarez Cabral　44ff.
カボ・ヴェルデ　Cabo Verde　34,151
カボ・トルメントソ　Cabo Tormentoso　38
カボ・ブランコ　Cabo Blanco　34
カラコルム　Karakorum, Karahorum　和林　27
カリカット　Calicut　39ff.
カリフォルニア灣　California, G.　102
カリブ海　Caribbean S.　77
カリャオ　Callao　158
カリヤン　Francisco Carrião　379
カルキサノ，マルチン・イリギエス・デ・　Martin Irriguiez de Carquisano　153
カルバリョ，ロペス・デ・　Lopes de Carvalho　150
カール・マルテル　Karl Martell　4
カールリ　Carli　123
カルロス一世（カール五世）　Carlos I. Karl V.　85,97,127,142,146, 154,156
カレタ　Careta　83,85
カロリン諸島　Caroline Is.　154ff.,159
カン，ディオゴ・　Diogo Cão　37
カンディア，ペドロ・デ・　Pedro de Candia　110
カンネス，ギル・　Gil Cannes　34
カンバヤ　Kambaya, Cambay　53
カンボヂヤ　Cambodia　412
ガゴ，バルテサル・　Baltesar Gago　208ff.,216,219ff.,223,225—7,240
ガスカ，ペドロ・デ・　Pedro de Gasca　142ff.
ガスナ　Ghasna　6
ガマ　Gama　バスコ・ダ・ガマ，ヴアルテ・ダ・ガマを見よ
ガムビア　Gambia　34ff.
ガヤキル　Guayaquil　108
ガラシヤ　Gracia（細川忠興夫人）　390ff.
ガリェゴ，エルナン・　Hernan Gallego　158
ガリレー　Galilei　160,414
ガルベス　Francisco Galves　403
ガロ（ガリヨ）　Gallo　106ff.
ガン　Ghent　15

キトー　Quito　84,119,125ff.,138,141—3
キボラ　Cibola（ニューメキシコ地名）　84
キュバ　Cuba　72ff.,86ff.,93,99

アムステルダム島　Amsterdam I.　151
アメリゴ　Amerigo, Americus　ヴェスプッチを見よ
アユチヤ　Ayuthia　411
アラゴン　Aragon　10
アラミノス，アントニオ・デ・　Antonio de Alaminos　87
アラリック　Alaric　5
アランダ，フアン・デ・Juan de Aranda　145
アリウス　Arius　3
アリストテレース　Aristoteles　6ff.,12ff.,33,64,66,68
アルガルヴェ　Algarve　31
アルキム　Arquim　34
アル・キンディ　Al Kindi, Alcindus, Alchindi　6
アルゴア灣　Algoa B.　38
アルゼンチン　Argentine　144
アルバラド，アロンソ・デ・　Alonso de Alvarado　143
アルバラド，ペドロ・デ・　Pedro de Alvarado　139ff.
アルバレズ，ジョルジ・　Jorge Alvarrez　174,188ff.
アルブケルケ，アフォンソ・デ・　Affonso d'Albuquerque　45ff. 47—56,59ff,80,144,172ff.
アルブケルケ，フランシスコ・デ・　Francisco d'Albuquerque　45ff.
アルベルガリア，ロポ・ソアレス・デ・　Lopo Soarez d'Albergaria　56
アルベルトゥス・マグヌス　Albertus Magnus　12,14,18,33
アルマグロ，ディエゴ・　Diego Almagro　(父)84,103ff.(子)140ff.
アルメイダ，ドン・ペドロ・デ・　Dom Pedro d'Almeida　256,259,261,280
アルメイダ，フラスシスコ・デ・　Francisco d'Almeida　47ff.,60,144,172
アルメイダ，ルイス・デ・　Luis d'Almeida　221ff.,226,239ff. 242—56, 259—64, 266ff, 271, 280ff,283—9,291—3,367,391
アレシャンドレ　Alexandre（京都の信者）　323
アンセルムス　Anselmus　9
アンゼリス　Girolamo de Angelis　403
アンタン　Antão　（結城左衞門）273,（京都の信者）323
アンダゴーヤ，パスクッル・デ・　Pascual de Andagoya　84,103
アンダマン　Andaman　29
アンヂェディヴ　Andjedive　47
アンティリア　Antilia　65,68
アンティル諸島　The Antilles　75
アントニオ　Antonio（日本人イルマン）　276,348
アントニオ，ドン・　Dom Antonio（籠手田）　225,281,283,286
アントワープ　Antwerp　15

アンドレー　Andre（山口人）　365
アンボイナ　Amboina　59,156

イサベラ　Isabela　69ff.,80
イサベル　Ysabel　158
イシュタッチワトル　Jxtaccihuatl, Jztaccihuatl　89
イスタッラパン　Istallapan　98
イスパハン　Ispahan　6ff.
イスラ・リカ　Isla rica　84
イノホサ　Hinojosa　142
イブン・トファイル　Ibn Tofail, Tophail, Abubacer　7
インカ　Inca　108ff.
インノセント四世　Innocent IV.　27

ウィクリフ　Wyclif　175
ウィツィロポチトリ　Huitzilopochtli　91
ウェルバ　Huelva　69
ウドン　Udong　412
ウラバ　Uraba　81
ウルサン　Ouru-San　712
ウルダネタ，アンドレアス・　Andreas Urdaneta　155ff.
ヴァスコゴンセルロス　Diogo Mendes de Vascogoncellos　52
ヴァルテマ，ルドヴィコ・ディ・　Ludovico di Varthema　47
ヴァンダル　Vandal　5
ヴィセンテ，マルチン・Martin Vicente　65
ヴェスプッチ，アメリゴ・　Amerigo Vespucci, Americus Vespuccius　73,78ff.,144
ヴェネチア　Venezia　14ff.
ヴォルガ　Volga　28

エウゲニウス　Eugenius IV.　67
エスキベル，フアン・デ・　Juan de Esquivel　74
エストゥレマドゥラ　Estremadura　88,102
エスピノーザ　Espinoza　85
エチオピア　Etiopia　32
エルヴァス　Élvas　153
エルナンデス，ガルチア・　Garcia Hernandes　70
エルナンデス・デ・コルドバ　Hernandes de Cordova　86ff.
エンシソ，マルチン・フェルナンデス・デ・　Martin Fernandez de Enciso　81ff.127

昭和二十六年一月十五日印刷
昭和二十六年一月二十日發行

鎖國縮刷版

定價 參百八拾圓

著者 和辻哲郎

發行者 古田晁
東京都文京區台町九

印刷者 山元正宜
東京都文京區柳町二六

發行所 株式會社 筑摩書房
東京都文京區台町九
電話小石川(85)〇〇五一番(業務)
二〇〇五七番(編集)
振替口座東京一六五七六八

三晃印刷株式會社印刷・矢島製本

人名地名索引

原語との對照表
を兼ね
カナ書き人名地名をのみ掲ぐ

ア 行

アイスランド	Iceland	65
アウグスチヌス	Augustinus	5
アヴィチェンナ	Avicenna, Ibu Sîna	7ff., 12ff.
アヴィニヨン	Avignon	15
アヴェロエス	Averrhoes	7ff., 12ff., 66, 68
アヴェンパチェ	Avempace, Abu Bekr, Ibu Bâdja	7
アカプルコ	Acapulco	157
アコスタ	José de Acosta	122
アゴスチニョ	Agostinho	(日本人少年) 251, (小西行長) 381
アーサ王	King Arthur	12
アステーク	Aztek	89ff., 100ff.
アストゥリアス	Asturias	10
アゾレス諸島	The Azores	65, 72, 75, 77
アタカマ	Atacama	125, 139
アタワルパ	Atahuallpa	125ff., 130ff.
アダムス, ウィリアム.	William Adams	398ff.
アディル・シャー	Adil Schah	51
アデン	Aden	30, 55
アナワク	Anahuac	90ff.
アッバス	Abbas	6
アビシニア	Abyssinia	29ff.
アビラ	Avila ペドラリアスを見よ	
アフォンソ五世	Affonso V.	37
アブル・ハッサン	Abul Hassan	31
アマゾン	Amazon	141, 143
アマルフィ	Amalfi	14

人名地名索引

原語との對照表

を兼ね

カナ書き人名地名をのみ掲ぐ

ア 行

アイスランド	Iceland	65
アウグスチヌス	Augustinus	5
アヴィチェンナ	Avicenna, Ibu Sîna	7ff., 12ff.
アヴィニヨン	Avignon	15
アヴェロエス	Averrhoes	7ff., 12ff., 66, 68
アヴェンパチェ	Avempace, Abu Bekr, Ibu Bâdja	7
アカプルコ	Acapulco	157
アコスタ	José de Acosta	122
アゴスチニョ	Agostinho	（日本人少年）251,（小西行長）381
アーサ王	King Arthur	12
アステーク	Aztek	89ff., 100ff.
アストゥリアス	Asturias	10
アゾレス諸島	The Azores	65, 72, 75, 77
アタカマ	Atacama	125, 139
アタワルパ	Atahuallpa	125ff., 130ff.
アダムス，ウィリアム.	William Adams	398ff.
アディル・シャー	Adil Schah	51
アデン	Aden	30, 55
アナワク	Anahuac	90ff.
アッバス	Abbas	6
アビシニア	Abyssinia	29ff.
アビラ	Avila ペドラリアスを見よ	
アフォンソ五世	Affonso V.	37
アブル・ハッサン	Abul Hassan	31
アマゾン	Amazon	141, 143
アマルフィ	Amalfi	14